

<資 料>

[古武道研究班]

空手道の近代化をめぐる船越義珍に関する研究課題

宮 本 知 次 中 谷 康 司
青 木 清 隆 小 林 勝 法
数 馬 広 二 外 間 哲 弘

1. はじめに

1-1. これまでの空手史研究の概要

空手道は今日、世界140カ国で行われ、またその稽古人口も4千万人を越えると目算される¹⁾。このように世界的な広がりを見せる武道として確立された空手道であるが、これまで我が国では、空手道の発展史に関する学術論文は多くない。数少ない論考として津山克典によるものがある²⁾³⁾。すなわち、空手の発祥した土地である沖縄（琉球国）の歴史を概観し、そこにおける中国文化との接点、支配制度（身分制度、土地制度、禁武政策）と空手との発祥の関係を探っている。また、沖縄空手が行われた身分階層（身分）や地域社会との関係について、16世紀頃から沖縄では身分と職業によって居住地が厳重に規制されていた点に着目し、各地域特有（首里手、那覇手、泊手）の空手の発展過程を説明するとともに、型の名称や空手と舞踊との関係から空手の発展過程に関して考察を加えている。この他には、著者らがまとめた唐手術の発祥に関する資料などがある⁴⁾。

このようにこれまで空手史が学術的な歴史研究の対象とされにくかったのは、歴史研究に必要とされる一次史料が極端に不足しているためであると考えられる。明治期以前についていえば、琉球への文字の伝来が13世紀末頃と遅かったために文字として記録に残っている史料が少なく、また、史書の編纂が始まったのが17世紀から18世紀にかけてと遅かったために史書も少ないといった状況である⁵⁾。それに加え、空手道独自の特殊性として、稽古が秘密主義かつ個人指導を基本として行われていたことや、その教授形態が口伝を中心としており、伝書のようなものが存在しなかったことから、さらに当時を伝えるものが存在しない状況が生まれて

いる。また、明治期以降であっても太平洋戦争の戦災により貴重な史料が焼失・散逸し、体系的な史料の入手は難しいのが現況である。

このような状況において、優れた二次史料は主に郷土史研究者や空手道研究者によって専門書籍として発表されてきた。それらは、学識者によって史実が仔細に検証された歴史研究から、様々な有力人物の口承を収集したもの、現地調査によって記載されたものなど多岐にわたっている。一例としては、藤原稜三『格闘技の歴史』⁶⁾、藤原稜三・儀間真謹『対談 近代空手道の歴史を語る』⁷⁾、金城昭夫『空手伝真録』⁸⁾、大西栄三『空手史』⁹⁾、外間哲弘『沖縄空手道の歩み』¹⁰⁾、『空手道歴史年表』¹¹⁾、東恩納盛男『剛柔流空手道史』¹²⁾、宮城篤正『空手の歴史』¹³⁾などが挙げられる。

これらの資料は、個々の関係者にまつわる史実について非常に詳細な記述がなされており、空手史研究には欠かせない貴重な二次史料である。しかし一方で、歴史研究に必要な一次史料による立証が成されていない記述や、曖昧な記憶に基づいた口碑なども混在しているため、その取り扱いには十分な注意を必要とする。

1-2. 空手史研究の必要性和方法論

前述のように空手史に関する学術論文は数少ないことから、学術的な立証性を兼ね備えた研究によって空手道の発展過程が明らかにされてゆくことが期待されている。また、二次史料に該当する空手史を扱った専門書籍の多くは絶版になっており、所蔵している図書館も限られるために入手困難である場合や、その存在が不明瞭な資料が多く、空手史を公に伝えていく役割を担うには充分とはいえない。こうした事実からも、中立的かつ学術的な立場から空手史が研究され、その成果が公刊される必要性が存在する。

しかし、空手史研究においては、従来の剣道や柔道に対するような時間軸に沿って歴史を紐解いていくといった研究方法を用いることが難しい。それは剣道や柔道が本土内という一定の文化圏で育まれてきたのに対し、空手道は琉球という明治期以前においては一種独特の文化圏で育まれてきたものが、大正期に本土に伝来し文化的土壌を替えるという、文化の背景となる地域性の分断に直面し、その影響を受けているからである。また、上述のように発展の前段階である明治期以前の記録がほとんど残っていないことから、時間軸を順番に辿っていくことが難しい。一次史料となる記述や口碑が現存するのは明治期以降である。そこで空手史研究においては、剣道や柔道のように時系列的に研究を進めるのではなく、史料が比較的残されている明治期以降、つまり空手が公開され近代化されていく過程をまず明らかにし、その結果明らかになった空手という文化の思想的背景や人間的背景、政治的背景をもとに時間軸をさかのぼ

り，空手史全体を明らかにしてゆくという方法論を取らざるをえない。また，現存する史料も一次史料に分類されるようなものが少ないため，従来の歴史研究のように一次史料だけに重きをおいて研究を進めていくことは出来ない。そこで空手史研究では二次史料に散在する様々な情報を注意深く整理し，他の史実・史料と照らし合わせて補正できる部分を補正するとともに，現地調査や口碑収集など人類学的な手法も取り入れて検証を重ねた上で，客観性を持った史実を明らかにしていくという方法を取らなければならないだろう。

1-3. 船越義珍研究の意義

空手史の研究は，近代化を基点として取り扱わなければならないことは前述した。まず本論では武道の近代化を「伝統的で複雑な伝承過程を辿る技術体系を，普及を目的に大衆化し，分かりやすい簡便なものを作り上げ，それを普及していく過程」であると定義する。このような基準に立つと，空手の近代化の開始はいつからと捉えることが出来るだろうか。元々，空手道の伝承は秘密裏に一部の地域で，しかも特定の人たちによって行われてきた。明治初期の稽古状況を回想し「私共がまだ少年の頃までは，空手の教授といふものを公然と行う事はなかった。その修行だとか，形の傳授だとかいふ事は，なかなかやかましく秘密にしたものであった。」といった記述も残されている¹⁴⁾。このように秘密裏に行われていた空手（当時は唐手，以下特別なものを除き空手と表記する）が一般に普及（公開）される契機は，明治34年4月の首里尋常小学校での正課体育採用を始めとして，明治35年11月の沖縄県立男子師範学校，明治38年11月の沖縄県立第一中学校での正課体育導入など，沖縄県内の主要な学校での正課体育への導入である¹⁵⁾。この空手の正課体育導入は，当時首里手の大家であった糸洲安恒（1832～1916，生没ともに諸説あり）による県学務関係者への働きかけによって県当局に採用されたものである¹⁶⁾。当初，実際の指導には糸洲安恒とともにその門下生であった屋部憲通（1866～1937），花城長茂（1869～1945）が指導にあっていた¹⁷⁾。この頃，同じ糸洲門下生でもあり糸洲安恒と並び称された安里安恒（1828～1906）にも師事していた船越義珍（1868～1957，但し戸籍上は1870年生，諸説あり，また昭和初期に富名腰から改称している，本論では時期に関係なく船越を用いる）は，地方新聞である『琉球新報』（1893創刊）に空手の紹介記事を執筆するとともに（1902）¹⁸⁾，明治38，39年頃には同士を募って県下を空手の公開演武をしながら巡回するなど空手の公開に尽力している¹⁹⁾。また，その他の動きとして，空手の指導はそれまで個人指導だけに教授方法が限られていたのに対し，那覇手の大家であった東恩納寛量（1853～1915）は明治22年（1889）に沖縄県初の空手道場を開設している²⁰⁾。このように明治の中期から後期にかけて空手は公開され，沖縄県下で広く知られるようになってゆ

く、特に正課体育導入は、空手の存在を多くの学童・生徒に知らしめただけでなく、実際に体験・習得した者を増やすという意味でも重要であり、さらには父兄を始め学童・生徒を取り巻く社会全体にも大きな反響を与えたという点でも、空手の公開・普及に最も実質的な効果があったと考えられる。つまり空手道の近代化は、この正課体育採用付近を基準に始まるとするのが妥当であろう。

その後、明治43年12月、八代六郎司令官率いる海軍練習艦隊が那覇に寄港した折、那覇の少年達による空手の集団演武会が披露され、その後沖縄師範学校において屋部憲通指導教官の下で選抜された乗組員将兵が「ナイハンチ」の型の特訓を受けている²¹⁾。また、出羽重遠大將(第一艦隊司令長官)率いる第一艦隊が中城湾に寄港した折にも、船越義珍が沖縄県立第一中学校において海軍将校に対して合宿稽古を行うなど、明治後期から大正期にかけて軍関係への空手紹介の機会が増える²²⁾。そして、大正5、6年頃になると船越義珍と又吉真光(1888～1947)によって本土初の公式演武が京都武徳殿において行われ、本土の多くの武道家に空手の存在が知られるようにもなった²³⁾²⁴⁾。続いて、大正10年3月6日、昭和天皇(皇太子時代)が渡欧の途次沖縄に立ち寄った際、船越義珍が演武の指導者を拝命し、首里城正殿の大広間において空手を演武して台覧に供した²⁵⁾。そして、船越義珍は大正11年4月沖縄県学務課からの要請をうけて上京、5月文部省主催の運動展覧会にて空手の紹介を行う²⁶⁾²⁷⁾。その後、船越義珍は、さらに尚家、講道館、陸軍戸山学校などでも演武・解説を行い²⁸⁾、そうしたつながりをもとに東京において指導・普及の道に入ってゆく。やがて大正13年の「慶応義塾大学唐手研究会」の発足に引き続き、早稲田大学、拓殖大学など多数の大学に「唐手研究会」が発足され、その後の発展に大きな影響を与えた。また、船越義珍と同時期に琉球王家の大名出身である本部朝基(1870～1944)が上阪しており、この本部朝基は大正11年11月京都市で催された拳闘対柔道の大会に飛び入り参加し、ボクサーを倒した。この記事が月刊誌『キング』(大正14年9月1日)に掲載され、空手の威力を広く国内に伝えることになった²⁹⁾。その後、昭和3年5月、那覇手の大家東恩納寛量の弟子で剛柔流の創始者となる宮城長順(1888～1953)、糸洲安恒、東恩納寛量の両氏を師事した糸東流創始者の摩文仁賢和(1889～1952)が相次いで本土に渡り、関西方面での空手普及を担うこととなる³⁰⁾。

こうした近代化の大きな流れの中ではこのようにたくさんの空手家が活躍したが、その中でも船越義珍は、「空手道普及の父」³¹⁾「近代空手道の父」³²⁾、或いは近代「空手中興の祖」³³⁾などと呼ばれ、空手道の近代化に重要な役割を果たした人物とされる。前述の通り船越義珍は空手が普及していく過程で、沖縄県下での公開演武、また師範学校での教授³⁴⁾³⁵⁾、軍関係者への紹介、天覧演武の指揮、そして何よりも本土で初めて公に空手を紹介し、全国に空手を普及した

功労者である。また、「唐手」を正式に「空手道」と称して一般に普及させたのも船越義珍によるものである⁶⁾³⁷⁾。このように船越義珍は空手道の近代化に対して最も深く関わった人物であり、空手道発展に生涯を捧げた人物である。また、船越義珍は明治元年の生まれであり、船越義珍に続いて本土に渡って空手を紹介した剛柔流の宮城長順、糸東流を興す摩文仁賢和に比して、20歳も年長である。他の2人の指導者が既に空手の公開され始めた頃に稽古を始めるのに対して、船越義珍は夜間師範宅に赴き個人教授を受ける時代を経験している貴重な存在である。また船越義珍は明治政府による琉球藩設置（1872年9月14日）および廃藩置県（1879年3月31日）に少年期を過ごし、沖縄の変革期をリアルタイムに経験している。さらには日清戦争（1894～1895）、日露戦争（1904～1905）の頃には既に指導者的な立場としてその時代を乗り越え、第2次世界大戦（1939〈1941～日本〉～1945）後も空手道の指導に携わっている。このように船越義珍は空手道普及の多くの場面に関わるとともに、「唐手」が「空手道」へと変革していく舞台となった社会的激動期の全てを体験した証人として捉えることもできる。これらのことから、この船越義珍という人物が空手道に捧げた人生を研究していくことによって、その時代背景、また当時の人間関係、そして空手道の近代化の歴史全般が明らかになってくると考えられる。そこで我々は先ず船越義珍に焦点をあて、船越義珍を通して空手道の近代化の道筋を探ってみることとする。

2. 船越義珍に関する研究課題

2-1. 船越義珍の略歴と空手界における足跡の概要

まず船越義珍の略歴と空手界における足跡の概要を知るために、幾つかの二次史料に記載される空手道の近代化に関係する船越義珍周辺の記事を収集し、年代順に並べた。ここでは正誤を問わず、例えば同じ事柄にもかかわらず年月日が違うなどの問題があってもそのまま掲載した。あくまでこの収集表は今後の研究・調査の手掛かりとして、研究の対象となるものを浮き彫りにするために作成した。そのような方法をとることで、船越義珍を中心とした空手道近代化の歴史を見たときに、どのような時期の情報が少ないのか、または何が誤解されて捉えられている事柄なのか、史料の現状を明らかにするとともに、船越義珍がどのように扱われているのかについても推察する意図を含めた。なお、調査対象は空手道の専門書籍に加え、各団体が公開するホームページなども含めて行った。近年、これらの媒体は広報媒体として重要な役割を担うようになり、信頼性と社会性を有するようになってきた。出版の採算性の無い重要な史料について公開している場合などもあることから、本論では重要な情報源として用いた。

(資料参照)

2-2. 船越義珍に関する研究課題

二次史料の記事収集に際し、船越義珍に関して次のような研究課題を今後検討する必要があることが明らかとなった。

- ①船越義珍の稽古歴：一般に船越義珍は安里安恒、糸洲安恒に師事したとされているが、本調査により新垣世璋^{あらがきせいしやう}、湖城大禎^{こじやうたいてい}などにも師事していた記載が見つかった³⁸⁾⁴⁰⁾。しかし、その詳細は不明である。また、安里安恒、糸洲安恒に師事した時期などにも記述にばらつきが見られ、今後検討が必要である。さらに、船越義珍が師事した安里安恒は琉球王家ともつながりが強く、空手の発展に政治的に関与していた可能性も考えられるが、史料が少ないため今後調査が必要である。
- ②船越義珍の沖縄空手界での立場・評価（船越義珍上京前）：船越義珍は沖縄尚武会会長として紹介されるが⁴¹⁾、今回の調査で尚武会に関する詳細を記載したものを検索することは出来なかった。船越義珍は昭和天皇（皇太子期）天覧演武の指揮をとるということは当時の沖縄空手界では相当な立場にあったと考えられる⁴²⁾。しかし、船越義珍が沖縄空手界で当時どのような地位にあったのかということの仔細を示す史料は極めて少なく、今後より詳細な調査・史料収集が必要である。
- ③船越義珍の沖縄空手界での立場・評価（船越義珍上京後）：船越は本土において「唐手」を「空手道」に変更することに始まり、稽古の大系を大きく変えて行く。しかし、これが沖縄においてどのように捉えられていたのかについてはほとんど記述が見つからない。本土と沖縄での空手に対する考え方の乖離なども含め、今後検討していく必要があるだろう。
- ④船越義珍の日本武道界での立場：船越義珍は嘉納治五郎（1860～1938）の招致により講道館で演武を行うなど⁴³⁾、嘉納治五郎とのつながりがあったことがわかる。しかし、実際にどのような交流を持ち、またどのような影響を受けたのかは判然としない。嘉納治五郎は近代柔道の大成者であるとともに、近代体育にも大きな影響を与えている。そのことから考えると、船越義珍と嘉納治五郎の関係を明らかにすることは、空手道の近代化の道筋を知る上でも非常に重要になってくる。また一方で、船越義珍は剣道の大家である中山博道（1872～1958）の道場「有信館」を借用して稽古するなど⁴⁴⁾、中山博道とのつながりも窺い知れる。しかし、実際にはどのような経緯で「有信館」に招かれたのか、またどのような交流があったのかについてはほとんど分かっていない。これらのことを調査するこ

とによって空手道が他の武道との関係でどのように近代化を果たしていったかが明らかになると考えられる。さらに、他の武道家との接触では、合気道創始者の植芝盛平（1883～1969）との記事があるがやはり詳細は不明であり⁴⁵⁾⁴⁶⁾、その他の武道家に関しては関係の有無も不明であることから、これも今後の検討課題である。これらと関連して、後続の空手家宮城長順や摩文仁賢和、その他の空手家とどのような関係にあったのかも明らかにする必要がある。

- ⑤船越義珍による普及と指導方法：船越義珍は大学関係を中心に多くの門人を持ったが、大学での指導方法と本部道場での指導方法など、どのようなものであったのか、またどのような違いがあったのかについても明らかにしなければならない。さらに、師範代を務めた下田武、船越義豪らとどのような関係で指導にあたったのか。また、特に大学関係では実際に普段どのような稽古が行われていたのか、船越義珍の意に添ったものであったのかどうかについても触れていかなければならない。
- ⑥船越義珍と弟子達との関係：船越義珍の初期の高弟であった大塚博紀や小西康裕はそれぞれ一派を興して独立しているが、船越義珍はこれらの人物とどのような関係にあり、また思想的にどのような違いを持っていたのか、そしてそれが船越義珍の門人や空手界にどのような影響を与えたのかについても検討しなければならない。

3. おわりに

空手道の近代化の解明に関するその他の研究課題

本研究では、「1-2. 空手史研究の必要性と方法論」で述べた方法論に則り、先ず二次史料に散在する情報の収集と年代別整理を行った。これらの調査の結果、前述のような検討課題が挙げられた。今後、この情報をもとに他の史実・史料と照らし合わせて補正できる部分を補正し、現地調査や口碑収集など人類学的手法も取り入れて、客観性を持った史実を明らかにしなければならない。

さらに、空手道の近代化全体を検討するにあたっては以下のような研究課題に着目する必要があると考えられる。

- ①大衆化（普及）の経緯と反応
- 学校教育への導入
 - 宣伝活動（様々な演武会）
 - 大学での指導

武道家、軍人との交流

- ②組織の形成とその問題点
- ③体育化に伴う問題点
- ④段位制度の採用に伴う問題点
- ⑤規範（道着、礼法など）
- ⑥名称問題（手、唐手、唐手術、唐手道、空手、空手道、カラテなど）と思想的背景
- ⑦競技化導入に伴う問題点
- ⑧その他

またこれらの諸問題については他の伝統武道、特に柔道、剣道など先発分野の近代化の足跡と比較しつつ、検証を重ねることも必要となるであろう。

参考文献

- 1) 外間哲弘（2001）空手道歴史年表，沖縄図書センター：3頁。
- 2) 津山克典（1979）沖縄史からみた空手の発展過程，拓殖大学論集 124：117-151頁。
- 3) 津山克典（1984）沖縄史からみた空手の発展過程，拓殖大学論集 149：85-114頁。
- 4) 小林勝法，宮本知次，青木清隆（2002）中国武術の琉球伝来と唐手術の発祥に関する研究課題，中央大学保健体育研究所紀要 20：113-123頁。
- 5) 岩井虎伯（2002）本部朝基と琉球カラテ，愛隆堂：98-103頁。
- 6) 藤原稜三（1990）格闘技の歴史，ベースボール・マガジン社。
- 7) 儀間真謹・藤原稜三（1986）対談 近代空手道の歴史を語る，ベースボール・マガジン社。
- 8) 金城昭夫（2001）空手伝真録，沖縄図書センター。
- 9) 大西栄三（1999）空手史，龍書房。
- 10) 外間哲弘（1984）沖縄空手道の歩み，自費出版。
- 11) 外間哲弘（2001）空手道歴史年表，沖縄図書センター。
- 12) 東恩納盛男（2001）剛柔流空手道史，チャンプ。
- 13) 宮城篤正（1987）空手の歴史，ひるぎ社。
- 14) 船越義珍（1943）空手入門，国防武道協会：1-14頁。
- 15) 外間哲弘（1984）前掲書：205-232頁。
- 16) 富名腰義珍（1990（初版1935））空手道教範復刻版，カヅサ：11-14頁。
- 17) 外間哲弘（1984）前掲書：205-232頁。
- 18) 外間哲弘（2001）前掲書：32頁。
- 19) 富名腰義珍（1990（初版1935））空手道教範復刻版，カヅサ：11-14頁。
- 20) 岩井虎伯（2002）前掲書：173-177頁。
- 21) 儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：81-90頁。
- 22) 儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：81-90頁。
- 23) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：11-14頁。
- 24) Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy（2004）Funakoshi Gichin Tanpenshu. International Ryukyu Karate Research Society：pp.158-163.

- 25) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：11-14頁.
- 26) 岩井虎伯（2002）前掲書：187-192頁.
- 27) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：11-14頁.
- 28) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：11-14頁.
- 29) 小沼保（1993）本部朝基正伝, 壮神社：5-6, 20-28頁.
- 30) 外間哲弘（2001）前掲書：40頁.
- 31) 長嶺将真（1986）史実と口伝による沖縄の空手・角力名人伝, 新人物往来社：109-120頁.
- 32) 岩井虎伯（2002）前掲書：187-192頁.
- 33) 毎日新聞（夕刊）1957.4.26. 七面.
- 34) 岩井虎伯（2002）前掲書：187-192頁.
- 35) 儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：59-68頁.
- 36) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：1-3頁.
- 37) 金城昭夫（2001）前掲書：27-34頁.
- 38) 岩井虎伯（2002）前掲書：187-192頁.
- 39) 藤原稜三（1990）前掲書：653頁.
- 40) 山本孝信・岩本忠雄（編）（1933）慶應大学空手部部誌『拳』7号, 慶應義塾空手研究会：5-9頁.
- 41) Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy（2004）op. cit.：pp.158-163.
- 42) 富名腰義珍（1990（初版1935））前掲書：11-14頁.
- 43) 儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：103-113頁.
- 44) 儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：127-137頁.
- 45) Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy（2004）op. cit.：pp.158-163.
- 46) 高木正朝（1988）嗚呼風雪空手道, 牧羊社：25-29頁.

(資料)

船越義珍関連記事一覧 (年代順・敬称などは当該資料のままとした)

西暦	年号	日付	出来事	出典
1828	文政11		安里安恒(あさと あんこう) 出生(～1906), 富名腰義珍(ふなこしぎちん)の唐手の師	慶応HP, 歴年p.23
1831	天保2		糸洲安恒(いとす あんこう) 首里儀保村に生まれる	沖縄HP, 長嶺pp.77-94, 本カラpp.193-201
1832	天保3		糸洲安恒出生(～1916年3月, 1831, 1838説あり)	慶応HP
1832	天保3		糸洲安恒, 首里儀保に出生(～1916年3月, 1830, 1831, 1838説あり), 富名腰義珍の唐手の師	歴年p.24
1840	天保11		新垣世璋(あらかき せいしょう)(～1920), 那覇久米に出生, 那覇手東恩納寛量(ひがおんな かんりょう)の師, 富名腰義珍も師事したとの記述あり	歴年p.25, 拳7号p.5-9
1866	慶應2		屋部憲通(やぶ けんつう)(～1937) 出生(糸洲門で富名腰義珍の兄弟子)	慶応HP, 歴年p.25, 長嶺p.82
1868	明治元	9月8日	明治改元	
1968	明治元	11月10日	富名腰義珍出生(～1957), 戸籍上は明治3年(1870), 医者志していたため, 医者年齢制限が明治3年以降だったために戸籍上の提出は1870年になっている	長嶺pp.109-120, 歴年p.27
186	明治元		富名腰義珍(後の日本渡来後, 船越義珍) 出生	本カラp.187, 慶応HP
1968	明治元		富名腰義珍首里に生まれる(戸籍上は1870年)	沖縄HP
1869	明治2		花城長茂(はなしろ ちょうも)(～1945), 首里山川に出生, 糸洲安恒の門下生	歴年p.27
1870	明治3	4月5日	本郡朝基(もとぶ ちょうき)(～1944), 首里赤平に出生	本カラpp.192-201
1870	明治3	11月10日	富名腰義珍出生(戸籍上)	図説pp.275-277
1872	明治5	9月14日	明治政府, 琉球藩を設置	沖縄HP, 歴年p.27
1879	明治12	3月31日	明治政府, 琉球県を廃し沖縄県を設置, 尚秦王, 首里城を明け渡す	慶応HP., 歴年p.28
1879	明治12		空手家・長嶺将真(ながみね しょうしん)は富名腰義珍が11歳から唐手の稽古を始めたと言っている	FGT p.158
1880	明治13	6月15日	沖縄県師範学校創立	慶応HP, 歴年p.28
1883	明治16	7月	皇居附属地内に済寧館道場が建設される	農大pp.207-237
1885	明治18	春	糸洲安恒(54歳), 沖縄県庁(書記)を退職	本カラp.164
1885	明治18		富名腰義珍, 17歳で沖縄師範学校の生徒になる	FGT p.158
1886	明治19		富名腰義珍, 18歳で那覇尋常小学校の代用教員に採用される	FGT p.158
1887	明治20		沖縄師範学校講習科を卒業し, 首里尋常小学校の代用教員となった	和道HP
1888	明治21		21歳の富名腰義珍, 教壇に立つ(断髪)	長嶺pp.109-120
1888	明治21		富名腰義珍, 正規の教員に採用される	FGT p.158
1888	明治21		宮城長順(みやぎ ちようじゅん), 那覇東町に出生. 東恩納寛量に師事し, 後に剛柔流を創始する	歴年p.29
1888	明治21		又吉真光(またよし しんこう)(～1947), 出生, 琉球古武術師範	歴年p.29
1889	明治22	2月	東恩名寛量, 沖縄初の空手道場を那覇に開設	慶応HP, 歴年p.29, 本カラpp.173-177

1889	明治22		摩文仁賢和（まぶに けんわ）、首里に出生。後に糸東流を創始する	歴年p.29
1890	明治23		富名腰義珍、湖城大禎（こじょう たいてい）（1837-1917、実践派の名手で、50歳を過ぎても二拳をもって牛を倒したといわれる）に入門、3ヶ月で破門	和道HP
1890	明治23		富名腰義珍、Kojō Taite（1837-1917）の下で3ヶ月間空手の稽古をする	FGT p.158
年号未記載※注			富名腰義珍は、初め蔡家拳の名手湖城大禎（1837-1917）の門に入って、少林拳南派の「巷百零八拳」を学ぶ	格歴p.653
年号未記載			富名腰義珍は教員になってから数年後、那覇手の湖城大禎に師事したと伝わるが、五尺足らずの身体は那覇手には向かなかつたらしく、数ヶ月で修行を諦め、先師の安里の家に下宿し、首里手の修行に励み、また同じ松村宗梶門の糸洲安恒に就いても修行を重ねる事となる	本カラ pp.187-192
1891	明治24		富名腰義珍、安里安恒に入門する、2年前後空手を稽古する	和道HP
1891	明治24		富名腰義珍、安里安恒の住居にて、その後（富名腰が結婚して転居するまで）二年におよぶ唐手術の稽古を始める	FGT p.158
1893	明治26	9月15日	琉球新報創刊	歴年p.30
1893	明治26		富名腰義珍、結婚する	FGT p.158
1895	明治28	4月17日	大日本武徳会が創立される	農大pp.207-237
1897	明治30		この頃、県立第一中学校、市立商業高校、師範学校等に唐手部設置される	沖縄HP
1897	明治30		県立第一中学校、市立商業、師範学校等に唐手部が設置	慶応HP、歴年p.31
1899	明治32		屋部憲通、琉球新報に「軍の教練について」を連載	歴年p.31
1899	明治32	3月	大日本武徳会が平安神宮西隣に武徳殿を完成する（東西30間・南北15間）	農大pp.207-237
1901	明治34		小川銀太郎（おがわ しんたろう）に唐手術を演武・解説	FGT p.158
1901	明治34		第1中学校、師範学校で空手が正科となる	沖縄HP
1901	明治34	4月	首里尋常小学校の体育に採用	沖縄pp.205-232
1901	明治34		糸洲安恒、県庁の役人を説得、平安の型を創作し、小学校に採用させる。（糸洲安恒70歳）	本カラ pp.163-169
1901 1902	明治34,5		視学官小川銀太郎による文部当局への上告により県立男子師範学校と県立第一中学校とに公式正科として採用	教範pp.11-14
1902	明治35		富名腰義珍「琉球新報」に「空手の歴史」掲載	慶応HP、歴年p.32
1902	明治35	6月	大日本武徳会が「武術家優遇例」を制定し、「範士」「教士」の称号制度を定める	農大pp.207-237
1902	明治35	11月	屋部憲通、囑託として師範学校で空手指導	歴年p.32
1902	明治35	11月24日	沖縄県立男子師範学校の正課体育に唐手導入（師範：糸洲安恒、師範代屋部憲通）	沖縄pp.205-232
1903	明治36		沖縄体育会発足	歴年p.32
1904	明治37	4月	糸洲安恒師範「平安」の形を創作・発表、尋常小学校の生徒の間では普及していたが、師範学校の場合、屋部憲通師範の指導方針は「ピンアン」の稽古をやる時間があるなら、「クーションクー」をやりなさいというものだったらしい。富名腰師範も東京に出る直前まではやっておらず、唐手研究会をリードしていた摩文仁賢和師範から教わった	近空pp.81-90
1904	明治37	4月	糸洲安恒「平安の型」を創作。ナイハンチなども改良	歴年p.32

1904	明治37		糸洲安恒「平安の形」創作、首里手の基本形の整理、統合、シナ拳法の原形のナイファンチなども改良	慶応HP
1904	明治37		糸洲安恒囑託として県立中学校で空手指導	沖縄HP
1904	明治37		糸洲安恒、沖縄県立第一中学校で空手指導	歴年 p.32
1904	明治37		屋部憲通囑託として師範学校で空手指導	沖縄HP
1904	明治37		「空手」の文字を使用	沖縄HP
1904	明治37	秋	県の学務課員、視察官、体育教官などの前で弟子を伴って、自ら解説し演武を披露（糸洲安恒）	本カラ p.167
1905	明治38	春	中学校と師範学校に体育武道として採用	本カラ p.167
1905	明治38		花城長茂県立中学校で空手指導	沖縄HP
1905	明治38		花城長茂・糸洲安恒の実績で立第一中学校・師範学校に唐手が採用、「トゥーデー」→「カラテ」に呼称変更	慶応HP
1905	明治38		糸洲安恒の実績で沖縄県立第一中学校および師範学校に唐手が正課として採用、「トゥーデー」→「カラテ」に呼称変更	歴年 p.33
1905	明治38		中山博道（神道無念流）が本郷真砂町に「有信館」を開く	農大 pp.207-237
1905	明治38	8月	花城長茂師範、空手の文字を使い始める、ただし一般に普及していたわけではない	近空 pp.139-148, 大観 p.64
1905	明治38	10月	大日本武徳会が武術教員養成所（京都武道専門学校）を開校する	農大 pp.207-237
1905	明治38	11月3日	沖縄県立第一中学校の正課体育に唐手導入・花城長茂（明治40年頃から糸洲安恒による指導）	沖縄 pp.205-232
1905	明治38	11月3日	花城長茂、沖縄県立第一中学校で空手指導	歴年 p.33
1905 1906	明治38,9		富名腰義珍、沖縄県下で公開演武巡回	教範 pp.11-14
	年号未記載		富名腰義珍、県庁落成式にて演武	教範 pp.11-14
	年号未記載		医師会にて「体育としての空手」という意味の演武、解説	教範 pp.11-14
	年号未記載		富名腰義珍、市内小学校の上級児童に指導、連合運動会で演武	教範 pp.11-14
1906	明治39		富名腰義珍、沖縄において唐手術演武会を主催	FGT p.158
1906	明治39		富名腰義珍生まれる	FGT p.158
1906	明治39		安里安恒、（松村宗棍（まつむら そうこん）の直弟子、船越義珍の師）死去	FGT p.158, 歴年 p.33, 慶応HP
1908	明治41		糸洲安恒「糸洲十訓」を示す	本カラ p.165
1908	明治41		糸洲安恒県学務課へ「唐手十ヶ条」を建言	沖縄HP
1908	明治41	10月	糸洲安恒、県学務課に「唐手十ヶ条」を建言	大観 pp.1-11, 歴年 p.33
1909	明治42		沖縄の学校システムに唐手術が公式に採用される	FGT p.158
1910	明治43		沖縄県立図書館設立	沖縄HP
1910	明治43	4月	儀間真謹（ぎましんきん）、沖縄師範学校で唐手術の稽古を始める。糸洲安恒師範80歳、実際の指導は体育教官屋部憲通先生が行っていた。沖縄第一中学校は体育兼軍事教官花城長茂先生が指導、富名腰義珍先生は首里尋常小学校の訓導で師範学校には来られなかった	近空 pp.59-68
1910	明治43	12月	八代六郎司令官（富名腰義珍は大佐と記しているが実際にはこの時少将）率いる海軍練習艦隊が那覇に寄港、那覇の少年達による唐手術の集団演武会を披露、乗組員将兵を選抜し沖縄師範学校の屋部憲通指導教官の下でナイハンチを習わせる	近空 pp.81-90

1912	明治45	春	出羽大将指揮下の第一艦隊が中城湾に寄港した折、県立第一中学校に寄宿して稽古をした	唐手 pp.1-4
1912	明治45		大日本武徳会が「武術専門学校」を創設する	農大 pp.207-237
1912	大正元		富名腰義珍、首里第1中学校にて、出羽海軍大将の命により、海軍将校に唐手術を教える	FGT p.158
1912	大正元	7月30日		慶応 HP
1912	大正元		第1艦隊中城湾に寄港。下士官県立1中で空手を習う	沖縄 HP
1912	大正元	11月	出羽重遠大将（第一艦隊司令長官）率いる第一艦隊が中城湾に寄港、沖縄県立第一中学校で合宿稽古を行う	近空 pp.81-90
1912	大正元		富名腰義珍、出羽大将率いる第一艦隊が中城湾に寄港した折、県立第一中学校にて下士官と兵士数名に1週間空手を指導する	松濤 HP
1912	大正元		沖縄尚武会設立	創世 pp.12-32
1912	大正元		富名腰義珍、沖縄尚武会の会長になる	FGT p.158
	大正の初め頃		富名腰義珍、摩文仁（まぶに）、本部（もとぶ）、喜屋武（きやん）、城間（しろま）、大城（おおしろ）、徳村（とくむら）、石川（いしかわ）、屋比久（やびく）、その他と首里・那覇を中心に空手の公開演武	教範 pp.11-14
1914	大正3		富名腰義珍、「沖縄の武技」と題した3篇の論文を書く	FGT p.158
1914	大正3	1月17-19日	安里安恒談、富名腰義珍著「沖縄の武技」を琉球新報に3回連載	歴年 p.35
1914	大正3		糸洲安恒死去	格歴 p.653
1914	大正3		糸洲安恒師範が亡くなる	近空 pp.81-90
1915	大正4		糸洲安恒死去	FGT p.158, 農大 pp.207-237
1915	大正4	12月	東恩納寛量師範が亡くなる	歴年 p.35, 近空 pp.81-90
1916	大正5		長嶺将真が泊小学校の3年生の頃、那覇区小学校連合運動会が奥武山公園で行われたとき、泊小学校で教鞭をとっていた富名腰義珍は、長嶺将真ら3年生以上の男子生徒に「ナイハンチ」と「ピンアン」を教えられ200名余りで団体演武をした	長嶺 pp.109-120
1916	大正5		富名腰義珍、京都武徳殿で空手演武を初公開	歴年 p.36
1916	大正5		富名腰義珍、京都武徳殿で演武	創世 pp.12-32
1916 1917	大正5,6		富名腰、京都武徳殿にて県を代表して演武	教範 pp.11-14
1917	大正6	5月5日	富名腰義珍、又吉Shinko（真光）ともに京都武徳殿において唐手術を演武	FGT p.159
1917	大正6	5月	摩文仁賢和師範を中心とした「沖縄唐手研究会」が那覇市内に発足、屋部憲通、花城長茂、徳田安文（とくだ あんぶん）、城間真繁（しろましんばん）、大城朝恕（おおしろ ちようじよ）、徳村政澄（とくむら まさずみ）、石川達行（いしかわ ほうこう）、富名腰義珍、宮城長順、摩文仁賢和など首里手系の大家が揃う（久米人の唐手家湖城、富村（とみむら）、新垣（あらかき）、真栄田（まえた）、池宮（いけみや）などは参加せず）	近空 pp.81-90
1917	大正6	5月	沖縄唐手研究会発会、摩文仁賢和宅にて屋部憲通、花城長茂、徳田安文、城間真繁、大城朝恕、徳村政澄、石川達行、富名腰義珍、宮城長順のメンバーが参集	歴年 p.36
1917	大正6		沖縄唐手研究会発足（摩文仁、屋部、花城、徳田、城間、大城、徳村、石川、富名腰、宮城）	慶応 HP
1918	大正7		富名腰義珍、摩文仁賢和の設立した「唐手研究会」に参加	和道 HP

1918	大正7		富名腰義珍, 他の唐手家と共に唐手術研究会を設立	FGT p.159
1919	大正8		藤原稜三の空手道辞典によれば富名腰義珍は摩文仁賢和より平安の型を習い, 屋部憲通の勧めにより師範学校の予科にて教えた	FGT p.159
1919	大正8		富名腰義珍, 屋部憲通の推薦を受けて, 師範学校予科にて課外体育として唐手術を指導	本カラ p.188
1919	大正8		大日本武徳会が武術専門学校を「武道専門学校」と改称する	農大 pp.207-237
1920	大正9	4月	屋部憲通師範のアメリカ行きにともない, 富名腰義珍, 沖縄師範学校予科生徒の唐手術囑託となる	近空 pp.59-68
1921	大正10		皇太子海外巡遊の途中寄港し首里城大広間で唐手演武をご覧になる	沖縄HP
1921	大正10	3月6日	昭和天皇が皇太子で在らせられた時, 御渡欧の途次沖縄に御立寄りになった際, 船越義珍先生が演武の指導者を拝命し, 首里城正殿の大広間に於いて那覇一中・師範の生徒を率いて唐手を演武して台覧に供した。	松濤HP
1921	大正10	3月6日	皇太子殿下(昭和天皇)に首里城正殿大広間において演武台覧の指導者として指導演武	教範 pp.11-14
1921	大正10	3月6日	皇太子裕仁殿下渡欧途次首里城正殿で空手演武見学	慶応HP
1922	大正11	4月	富名腰義珍上京(明正塾へ)	本カラ p.189
1922	大正11		文部省主催第1回運動展覧会が東京で開催。沖縄から富名腰義珍が説明のため上京	沖縄HP
1922	大正11		富名腰義珍, 儀間真謹をアシスタントとして東京御茶ノ水の岸会館で開かれた第1回国民体育展覧会にて唐手術を演武	FGT p.159
1922	大正11	4月30日	御茶ノ水の「東京博物館」で, 文部省主催の「運動体育展覧会」開催, 富名腰義珍発表	創世 pp.12-32
1922	大正11		文部省主催第一回体育展覧会	慶応HP
1922	大正11	5月	文部省主催運動展にて演武	図説 pp.275-277
1922	大正11	5月6日	船越義珍先生が文部省主催の第一回古武道体育展覧会に沖縄より上京し, 沖縄秘術「唐手」を紹介した。以後, 東京に滞り各所で講演・実演をし, 唐手の普及を「唐手研究会」という名称のもとに努められた。	松濤HP
1922	大正11	5月7日	富名腰義珍, 儀間真謹両氏が, 第1回体育天覧会場(東京女子高等師範学校講堂・御茶ノ水湯島聖堂)において首里手形を演武紹介する	農大 pp.207-237
1922	大正11	早春	文部省主催第1回運動展覧会に出品	教範 pp.11-14
1922	大正11	5月17日	嘉納治五郎師範が, 富名腰義珍・儀間真謹の両氏を旧小石川区下富坂町の旧講道館道場に招いて唐手術の形および約束組手の紹介演武会を催した。	近空 pp.103-113, 創世 pp.12-32
1922	大正11	6月	富名腰義珍, 講道館にて演武・解説	FGT p.159, 本カラ p.189
1922	大正11		講道館にて富名腰義珍, 「観空大」, 儀間真謹「ナイフアンチ」を演武	慶応HP
1922	大正11	6月2日	富名腰義珍, 小杉放庵画伯主宰するボブラ倶楽部で空手を演武	船越70pp.34-41
1922	大正11	6月3日	東京日日新聞に富名腰義珍・唐手の記事が掲載される	沖縄HP, 船越70pp.28-29
1922	大正11	6月4日	富名腰義珍, 講道館で空手を演武	船越70pp.34-41
1922	大正11	6月25日	嘉納治五郎講道館館長が下富坂道場に富名腰義珍, 儀間真謹の両氏を招いて首里手形の演武を初めて門人に紹介する	農大 pp.207-237
1922	大正11	6月~8月	富名腰義珍, 儀間真謹とともに各所で紹介演武を行う	近空 pp.115-125
1922	大正11	7月	大塚博紀(和道流創始者), 富名腰義珍より琉球空手術を学び始める	和道HP

1922	大正11		大塚博紀（後の和道流開祖），平信賢（たいら しんけん），富名腰義珍に入門	FGT p.159
1922	大正11	7月末頃	大塚博紀，明正塾の富名腰師範を尋ねる	空手道 pp.54-56
1922	大正11	7月～9月	富名腰義珍，講道館の高段者を相手に唐手術の講習を行う	本カラ p.189
1922	大正11	7月～12月	沖縄県学生寮「明正塾」を一時的な道場として使用する（富名腰義珍）	FGT p.159
1922	大正11	8月	富名腰義珍，ポブラクラブ講習会	嗚呼 p.25-29
1922	大正11	8月	富名腰義珍，明正塾道場開設	嗚呼 pp.25-29
1922	大正11	8月	富名腰義珍，沖縄県人学生寮「明正塾」の講堂内で唐手術の普及を開始する	農大 pp.207-237
1922	大正11	9月	松田勝一（東大医学部），明正塾で稽古を始める	近空 pp.115-125
1922	大正11	9月上旬	明正塾の1階講堂で唐手術の稽古を始める（富名腰義珍）	近空 p.115-125
1922	大正11	9月初旬	大塚博紀，明正塾富名腰義珍を訪問	近空 pp.249-259
1922	大正11	9月中旬	慶應大学粕谷真洋教授，大塚博紀，松田勝一の順に富名腰義珍に入門	近空 pp.115-125
1922	大正11	9月中旬	大塚博紀，明正塾の富名腰師範を尋ねる	近空 pp.115-125
1922	大正11	10月	松田勝一（東大）入門，当時は大塚博紀，秋葉さん（中央郵便局員），近所の店員一人だけの門人	空手道 pp.26-33
1922	大正11		富名腰義珍著「琉球拳法唐手」発行	沖縄 HP
1922	大正11	11月25日	富名腰義珍「琉球拳法唐手」発刊	教範 pp.11-14
1923	大正12	3月頃	慶應大学粕谷真洋教授の紹介で，剣道師範の小西康裕入門，四心多久間流の清水敏之，念流の下田武，剣道家の秋葉英雄らはさらにその後の入門（富名腰門下）	近空 pp.115-125
1923	大正12		中山博道の道場に招待される	FGT p.159
1923	大正12	9月1日	関東大震災	FGT p.159， 農大 pp.207-237
	大正		富名腰義珍，旧藩家，講道館，軍関係学校，法曹会，中等学校体育研究会，ポブラ倶楽部他多数にて空手紹介演武	教範 pp.11-14
1924	大正13		富名腰義珍，東京に唐手術研究会を設立し，初代会長となる	和道 HP
1924	大正13		富名腰義珍の三男義豪上京	FGT p.159
1924	大正13		富名腰義珍，東京上野の自治会館における展覧会にて挨拶する	FGT pp.159-160
1924	大正13		富名腰義珍，上野自治会館演武会に参加	嗚呼 p.25-p.29
1924	大正13	4月12日	富名腰義珍，空手の段位初発行（儀間真謹，粕谷真洋，大塚博紀，小西康裕，等）	慶応 HP
1924	大正13	4月12日	富名腰義珍，7人の門人にはじめての段位を授与する（大塚博紀，徳田安文，秋葉英雄，清水敏之，広瀬，粕谷真洋，儀間真謹）免状は月の平均賃金が50円の時代に5円	FGT p.160
1924	大正13	5月5日	皇居清寧館道場において富名腰義珍と大塚博紀の両名，空手術の演武公開する	和道 HP，創世 pp.79-100
1924	大正13	9月頃	富名腰義珍，大塚博紀を伴い，粕谷教授の紹介で慶応普通部剣道場を訪れ，当時剣道教師であった小西康裕と出会う。来訪の理由は，唐手の稽古のために剣道場を借りるため	空手道 pp.26-33
1924	大正13	10月	小西康裕，富名腰義珍に入門	空手道 pp.26-33
1924	大正13	10月15日	慶應義塾大学唐手術研究会設立，富名腰義珍氏が師範に就任	慶応 HP，慶應 75p.304

1924	大正13	10月15日	慶應義塾体育会空手部発足	研究pp.72-74
1924	大正13	11月1日	慶應大学唐手研究会発足	嗚呼pp.25-29
1924	大正13	末	富名腰義珍, 東京市民体育資料募集にバス, 上野自治会館において公開演武	教範pp.11-14
1925	大正14	3月10日	富名腰義珍『練胆護身唐手術』発刊, 天覧	教範pp.11-14
1925	大正14		富名腰義珍, 仲宗根源和のアシスタントにより『練胆護身唐手術』を発刊	FGT p.160
1925	大正14	10月	東京帝国大学唐手研究会設立	慶応HP
1925	大正14	10月5日	東京帝国大学唐手研究会(師範:富名腰義珍)	農大pp.207-237
1925	大正14	10月15日	東京帝国大学唐手研究会設立	近空pp.353-363
1925	大正14	5月	摩文仁賢和師範, 大正6年設立の「唐手研究会」を拡充整備, 「唐手研究倶楽部」に改称	近空pp.139-148
1926	大正15		大塚博紀, 富名腰義珍より独立	和道HP, 創世pp.79-100
1926	大正15	3月	「唐手術大会」開催。(主催・宮城長順, 摩文仁賢和, 演武・屋部, 花城, 久場(くば), 喜屋武(きゃん)等), 嘉納治五郎・三船久蔵見学	慶応HP
1926	大正15	10月	日本体育協会沖縄県支部, 沖縄県柔道有段者会の招きで嘉納治五郎師範を招いた折, 空手研究倶楽部の摩文仁賢和・宮城長順が演武会の世話役にあたる。これに際し, 県学務課では「唐手」の名称が良くないとの意見があり「首里手」「那覇手」「泊手」という名称が生まれる	近空pp.139-148
1926	大正15	10月	富名腰義珍, 東大唐手研究会と記念撮影	空手道: 写真
1926	大正15	10月	東大唐手研究会発足	嗚呼pp.25-29
1926	昭和元	12月25日		
1927	昭和2		本部朝基, 富名腰義珍の宗家争いが話題となり, 東京日日, 都, 報知の各新聞に報道される	空手道pp.26-33
1927	昭和2		屋部憲通, アメリカロサンゼルス, ハワイで空手指導	沖縄HP, 歴年p.40
1927	昭和2	4月	富名腰義珍(唐手研究会会長)が, 中山博道(神道無念流師範・大日本武徳会範士)の主宰する本郷真砂町「有信館」道場を借りて, 唐手術普及を続ける	農大pp.207-237
年号未記載			富名腰義珍師範は, それまで住んでいた明正塾(沖縄県人寮)が改築されることになり, 西郷家の斡旋で「有信館」に一時身を寄せ, 暫くして本郷弓町の小さな借家に移る(弓町の借家時代はまだ有信館でも稽古をしていた)	農大pp.122-127
年号未記載			関東大震災による明正塾の改修問題により, 明正塾を立ち退く・中山博道範士の「有信館道場」の空き時間に稽古する	近空pp.127-137
1927	昭和2	5月6日	富名腰義珍が門人の大塚博紀を東京帝国大学唐手研究会員に紹介する	農大pp.207-237
1927	昭和2	5月10日	東洋大学に唐手研究会が発足する	農大pp.207-237
1927	昭和2	6月下旬	第一高等学校唐手研究会発足	拳1号pp.92-93
1927	昭和2	9月	一高唐手会発足	嗚呼pp.25-29
1928	昭和3		富名腰義珍, 小西道場を訪問する	FGT p.160
1928	昭和3	2月20日	宮内省濟寧館演武大会に慶應義塾学生を派遣	慶應75p.304, 拳1号pp.50-56
1928	昭和3	2月20日	富名腰義珍, 宮中濟寧館演武会に参加	嗚呼p.25-29
1928	昭和3	3月20日	富名腰義珍, 宮中濟寧館において演武	FGT p.160

1928	昭和3	3月20日	富名腰義珍，宮中濟寧館において同門15名と共に演武	教範 pp.11-14, 船越70pp.34-41, 松濤60pp.139-147
1928	昭和3	5月	摩文仁賢和，唐手術普及のため上京	歴年 p.40, 近空 pp.139-148
1928	昭和3		宮城長順，京都大学・関西大学・武徳殿において演武公開	歴年 p.40
1928	昭和3		宮城長順（那覇手）が京都大学，関西大学，京都武徳殿において，那覇手形を公開演武する	農大 pp.207-237
1928	昭和3		富名腰義珍，東京で摩文仁賢和・宮城長順と会う	FGT p.160
1928	昭和3	5月10日	帝大演武会・富名腰先生，大塚氏，新垣氏，糸満（いとまん）氏，下田氏その他2,3名が明正塾より参加，富名腰先生「公相君（大）」を演武	慶應75p.107
1928	昭和3	5月14日	富名腰先生，大塚氏を伴って慶應義塾唐手研究会に来訪，慶應会員大塚氏の指導を受ける	慶應75pp.107-108
1928	昭和3	6月17日	水戸の公会堂にて新聞社の後援で唐手公演会（観客300人位），富名腰先生，本部の下田，秋葉，竹原，帝大の大島，慶應が演武	慶應75p.108
1928	昭和3	11月8日	明正塾に前横綱大錦関が唐手を見学に来る	慶應75p.109
1929	昭和4		大塚博紀が日本古武道振興会発足，自らの空手を「和道流空手術」と命名して同会に入会	創世 pp.79-100
1929	昭和4		富名腰義豪，沖繩より帰り，杜鎮の型を創作，紹介する	FGT p.160
1929	昭和4		船越義珍先生が「唐手」を「空手」に変更された	松濤HP
1929	昭和4	2月1日	富名腰義珍，慶應大学にて五十四歩を教える，大分忘れていところがある	慶應75p.112
1929	昭和4	2月10日	富名腰義珍，慶應大学唐手研究会卒業生送別会に出席	慶應75pp.112-113 および写真集
1929	昭和4	3月	富名腰義珍，摩文仁賢和氏と大阪で会見	嗚呼 p.25-p.29
1929	昭和4	4月15日	慶應義塾において，唐手を空手と改称する（慶應，年度始めの稽古：富名腰師範号令の下で型を復習する）	慶應75p.113
1929	昭和4	4月24日	一高にて演武会，一高，慶應，帝大が参加，富名腰先生チントウと組手を演武，相手の演武では今までにない猛烈さで実戦的な技を示され，一同を感嘆させた	慶應75pp.113-114
1929	昭和4	5月	富名腰義珍，本郷真砂町34番地の借家道場にて唐手術普及活動を続ける	農大 p.207-p.237
1929	昭和4	5月11日	帝大にて演武会，一高，帝大，慶應，富名腰師範参加（挨拶・実戦応用解説），富名腰師範は演武の予定がありながら無断欠席した慶應幹部に対して「大塚の病気が染み込んだ」と憤慨された	慶應75p.114
1929	昭和4	6月17日	富名腰義珍，慶應にて平安初段～五段までを演武	慶應75p.115
1929	昭和4	8月	東京帝国大学唐手研究会員・三木二三郎が唐手研究のために沖縄県に渡り，首里手形，那覇手形，泊手形を学んで帰る	農大 pp.207-237
1929	昭和4	秋	富名腰義珍，唐手術を空手道と改名	嗚呼 pp.25-29
1929	昭和4	秋	富名腰義珍，ボブクラブ，三越，東大各演武会に参加（小幡功，寺田行雄，高木正朝ほか）	嗚呼 pp.25-29
1929	昭和4	秋	富名腰義珍水戸公会堂演武会に参加（大塚博紀ほか）	嗚呼 pp.25-29
1929	昭和4	9月	東京帝国大学唐手研究会の陸奥瑞穂が2代目の師範となる	農大 pp.207-237
1929	昭和4	10月20日	慶應義塾唐手研究会創立5周年記念大会にて空手道宣言，富名腰師範挨拶（宣伝の時代から研究の時代へ）	慶應75 pp.116-117, p.304
1929	昭和4	10月30日	富名腰義珍，慶應大学にて「セーシャン」を演武	慶應75p.117

1929	昭和4	11月15日	富名腰義珍、慶應大学にて「ジッテ」の意味を説明、空手の本質についても話す	慶應75pp.117-118
1929	昭和4	11月30日	東京帝国大学唐手研究会主催の演武会に前師範・富名腰義珍の代理として、下田武・大塚博紀の両氏が演武する	農大pp.207-237
1929	昭和4	12月	富名腰師範、東京大学唐手研究会の師範を辞退	近空pp.139-148
1929	昭和4	12月5日	富名腰義珍、東京帝国大学唐手研究会師範を辞退する	農大pp.207-237
1930	昭和5		拓殖大学に空手部創立	FGT p.160
1930	昭和5		拓殖大学空手研究会、松坂屋空手研究会など稽古盛ん、松蔭女学校空手部なども出来る	拳1号pp.92-93
1930	昭和5		空手道を研究する人達の連絡融和と緊密を深めることを目的として、船越義珍先生を主宰として「大日本空手道研究会」を設立	松濤HP
1930	昭和5		小石川水道端台の一角、明正塾道場にて大日本空手研究会、朝夕二回の稽古、義豪・小幡三段、組手の練習に主力を注ぐ	拳1号pp.92-93
1930	昭和5		富名腰義珍の教え子、陸奥瑞穂・三木二三郎（東京帝国大学唐手研究会）、「拳法概説」を著す	FGT p.160
1930	昭和5	1月	三木二三郎・高田瑞穂「拳法概説」を出版	歴年p.41
1930	昭和5	春	拓殖大学空手研究会設立	拓殖pp.2-3
1930	昭和5	4月	東京帝国大学唐手研究会三木二三郎・高田瑞穂共著「拳法概説」刊行	農大pp.207-237
1930	昭和5	5月	拓大講演会と演武会（日置乙次郎、高木正朝）直ちに活動開始	嗚呼pp.25-29
1930	昭和5	5月3日	拓殖大学の唐手研究会が発足する（富名腰義珍・下田武）	農大pp.207-237
1930	昭和5	5月10日	東京帝国大学唐手研究会主催演武会開催、富名腰義珍・下田武・大塚博紀などの明正塾関係者出場を辞退	農大pp.207-237
1930	昭和5	秋	早大演武会（高木、釘宮、吉田ほか五名）	嗚呼pp.25-29
1930	昭和5	11月9日	富名腰義珍、慶應義塾秋季大会に参加	拳1号p.56
1930	昭和5	11月27日	富名腰義珍、慶應大学唐手研究会 会誌・拳1号に空手二十ヶ条を著す	拳1号pp.1-2
1930	昭和5	11月30日	宮城長順、沖縄県体育協会唐手部長に就任	沖縄HP、歴年p.41
1931	昭和6		雑誌「松濤」記念号を刊行・以降3号まで	早大HP、 早大50pp.125-145
1931	昭和6	1月	日本医科大学が富名腰義珍先生を迎え、医学生として、日本で初めて空手研究会を設立	日医pp.108-111
1931	昭和6	春	「有信館道場」が使用できなくなり、旧本郷区真砂町三十四番地の一軒家を稽古場とする、庭に板を敷き詰めて、	近空pp.127-137
1931	昭和6	春	明正塾での稽古が出来なくなり、中山博道先生の御厚意により「有信館」を晚七時から拝借することができ、空手道教授続ける	船越70pp.34-41, 松濤60pp.151-161
1931	昭和6	4月5日	日本医科大学唐手研究会発足（下田武）	農大pp.207-237
1931	昭和6	5月20日	東京商科大学唐手研究会発足（富名腰義珍）	農大pp.207-237
1931	昭和6	5月21日	関西大学唐手研究会発足（摩文仁賢和）	農大pp.207-237
1931	昭和6	5月29日	一橋空手会発会式、慶應義塾多数参加演武、富名腰師範はジョンを演武する	拳2号pp.78-80
1931	昭和6	9月	早大空手研究会発足	嗚呼pp.25-29
1931	昭和6	9月22日	早稲田第一高等学院空手研究会発会式（師範富名腰義珍、師範代下田武）、演武会（慶應義塾部員派遣）	拳3号pp.175-176

1931	昭和6	9月26日	日本医科大学空手研究会発会式（慶應義塾部員派遣）	拳3号 pp.175-176
1931	昭和6	9月27日	早稲田大学第一高等学院空手部発足・富名腰義珍師範の講話	早大HP, 早大50pp.125-145
1931	昭和6	10月6日	警視庁本庁道場開き（慶應義塾部員派遣）	拳3号 pp.175-176
1931	昭和6	10月22日	築地警察署演武会（慶應義塾部員派遣）	拳3号 pp.175-176
1931	昭和6	11月	富名腰義珍師選暦	早大HP, 早大50pp.125-145
1932	昭和7		船越義珍，宮城長順，小西康裕会見	空手道：写真
1932	昭和7		日本医科大学空手研究会，早高空手研究会（部に昇格），一高唐手研究会，東京商科大学一橋空手研究会，拓殖大学空手研究会，関西大学空手研究会（摩文仁賢和師範）などが盛んに稽古を行っている模様。大日本空手研究会本部は本部道場建設に向けて計画を進行中	拳5号 pp.229-230
1932	昭和7	1月10日	富名腰義珍，慶應大学送別会に参加，訓話を述べる	拳4号 pp.107-108
1932	昭和7	2月	富名腰義珍，慶應義塾空手研究会の納会に出席（拳4号には1月10日とある）	慶應75：写真集
1932	昭和7	2月3日	富名腰義珍，慶應大学唐手研究会 会誌・拳3号に「空手の沿革」を著す	拳3号 pp.12-17
1932	昭和7	3月21日	慶應義塾部員，大日本空手研究会本部道場（本郷区真砂町有信館）にて義豪氏より指導を受ける，要点を拳4号にまとめる	拳4号 pp.106-107
1932	昭和7	春	隣に越してきた未亡人の吉山ます子さんと交渉，階下を借りて道場とする「真砂町道場」	近空 pp.127-137
1932	昭和7	5月22日	慶應義塾部員，網町運動場小道場に宮城長順先生を迎え，「三戦」の教授を受ける。当日は，富名腰師範，義豪さんも参加	拳4号 pp.94-98
1932	昭和7	9月	関西学院大学唐手研究会発足（摩文仁賢和）	農大 pp.207-237
1932	昭和7	9月25日	富名腰義珍，中山博道範士主宰の「有信館」唐手道場を完全撤去し，東京府本郷区真砂町34番地に新しく「真砂町道場」を開設し，引き続き門人の指導にあたる	農大 pp.207-237
1932	昭和7	10月	富名腰義珍，日本医科大学屋上における空手練習を指導	日医 p.20
1932	昭和7	10月15日	慶應大学唐手研究会，体育会空手部となる	慶應75p.305
1932	昭和7	10月30日	富名腰義珍，日本医科大学空手創立1周年記念大会に参加，他に慶応，早稲田，東京商大，第一高等学校が参加	日医 p.21
1932	昭和7	10月30日	富名腰義珍，下田武，日本医科大学において模範組手型を演武	日医 p.21
1932	昭和7	11月15日	富名腰義珍，慶應大学体育会空手部 会誌・拳5号に「空手は謙譲の美徳を養う」を著す	拳5号 pp.39-41
1933	昭和8		早稲田大学空手部，船越義豪先生の引率の下，新愛知新聞主宰の演武会（名古屋公会堂）で演武	早大50p.10
1933	昭和8		一橋空手会，日本医科大学空手研究会，拓殖大学空手部（船越師範），一高唐手研究会など活動報告あり	拳6号 pp.224-226
1933	昭和8		富名腰義珍，慶應大学で型の演武をしている映像を残す	FGT p.161
1933	昭和8		富名腰義珍，四谷南天坊で植芝師範会合	嗚呼 p.25-29
1933	昭和8		富名腰義珍，植芝盛平と会う	FGT p.161
1933	昭和8		富名腰義珍，平信賢の道場でセミナーを開く	FGT p.161
1933	昭和8	1月	富名腰義珍，慶應義塾寒稽古に参加	慶應75：写真集
1933	昭和8	1月	富名腰義珍，下田武，早稲田大学新年会に参加	早大50p.9

1933	昭和8	2月10日	富名腰義珍、慶應義塾体育会空手部、納会・卒業生送別会に参加・挨拶	拳6号pp.168-191
1933	昭和8	2月11日	『富名腰義珍先生記念還暦詩文集』発刊、植村常次郎編	詩文：奥付
1933	昭和8		『富名腰義珍先生記念還暦詩文集』	大観復刻pp.1-11
1933	昭和8	2月	『富名腰義珍先生記念還暦詩文集』発刊	近空pp.127-137, pp.227-236
1933	昭和8	2月25日	共立女子職業専門学校における空手紹介演武会に慶應義塾部員を派遣、富名腰師範解説	慶應75p.305, 拳6号p.191
1933	昭和8	4月	大日本武徳会沖縄県支部が空手道の柔道部門への入部を認可	近空pp.139-148
1933	昭和8	4月	富名腰義珍、摩文仁賢和、小西康裕会見	空手道：写真
1933	昭和8	4月25日	一高紹介演武会に慶應義塾部員を派遣	慶應75p.305
1933	昭和8	5月1日	早稲田大学空手研究会発足（富名腰義珍・野口宏）	農大pp.207-237
1933	昭和8		富名腰師範のご指導による空手研究会が、早稲田体育会に入会する	早大HP, 早大50pp.125-145
1933	昭和8	6月	日本医科大学空手部、関西大学空手選手招待、船越師範、下田師範参加	日医pp.31-57
1933	昭和8	6月1日	富名腰義珍、慶應大学体育会空手部 会誌・拳6号に「非常時日本の参考として」を著す	拳6号pp.16-18
1933	昭和8	6月18日	富名腰義珍、慶應大学体育会空手部 春季大会に参加（講評を述べる）	拳7号pp.230-231
1933	昭和8	7月	富名腰義珍、富山清水道場講習会	嗚呼pp.25-29
1933	昭和8	10月	日本医科大学第2回空手演武大会、各大学招待選手も出場、船越師範・下田師範も参加	日医pp.31-57
1933	昭和8	10月7日	慶應義塾部員、10月7日から毎週土曜日に義豪氏の特別稽古を受ける	拳7号pp.129-132
1933	昭和8	10月31日	富名腰義珍、慶應大学体育会空手部 会誌・拳7号に「空手道に就いての一考察」を著す	拳7号pp.5-9
1933	昭和8	12月	船越師範および下田師範、日本医科大学空手部送別会に参加	日医pp.31-57
1934	昭和9		富名腰義珍門下の松濤館流各校との交歓稽古始まる	早大HP, 早大50pp.125-145
1934	昭和9		富名腰義珍、本郷弓町に空手道場（松濤館）を建築	慶応HP、歴年p.43
1934	昭和9	1月	富名腰義珍、日本医科大学寒稽古にて指導・納会に参加	日医pp.31-57
1934	昭和9	3月21日	上野松坂屋体育会空手部春季演武会に慶應義塾部員7名を派遣	慶應75p.305
1934	昭和9	3月21日	富名腰義珍、上野松坂屋体育会空手部春季演武会に参加・挨拶	拳8号pp.201-203
1934	昭和9		宮城長順ハワイで空手指導	沖縄HP
1934	昭和9	4月1日	東京府神田区末広町63番地に大日本空手振興倶楽部設立（大塚博紀・川上大三郎・宮地要二郎）	農大pp.207-237
1934	昭和9	4月16日	慶應大学に富名腰義珍師範に伴われて関西大学空手師範摩文仁賢和先生および他一名の先生が来訪する、慶應部員は型・組手を披露	慶應75p.140, 拳8号p.204
1934	昭和9	4月17日	慶應空手部員、摩文仁先生より「セーエンチン」を習う	慶應75pp.140-141, 拳8号p.204
1934	昭和9	5月9日	富名腰義珍、慶應義塾進上部員の歓迎会に参加・挨拶	拳9号pp.217-218
1934	昭和9	5月10日	慈恵医科大学空手研究会発足（下田武・大塚博紀）	農大pp.207-237

1934	昭和9	6月1日	富名腰義珍，慶應大学体育会空手部 会誌・拳8号に「恩師安里安恒先生の逸話」を著す	拳8号 pp.18-24
1934	昭和9	7月	下田師範，日本医科大学夏合宿（伊豆大島）にて指導	日医 pp.31-57
1934	昭和9	夏	日本医科大学空手部内（予科）において，稽古に来ていただくのは，船越先生ではなく，下田先生にして欲しいという要望が出された。船越先生は型を教える進捗度も遅く，平安の型にとどまること多く，組手と積極的にやる下田先生への要望が強く出されるのも無理のないことであった。しかし，下田師範はご病気になられて，惜しまれつつご逝去になり，代わって大塚博紀師範（現和道流最高師範）にきていただくことになった	日医 pp.31-57
1934	昭和9	7月27日	早稲田大学空手部九州一周演武旅行に東京を出発，若松，博多，佐世保，大牟田，人吉，延岡と廻る。下田師範以下，早稲田大学空手部員6名	江上 pp.177-182
1934	昭和9	8月	下田武師範代引率，早大空手道部九州演武会	嗚呼 pp.25-29
1934	昭和9	8月頃	富名腰義珍，平安初段と二段の順序を入れ替える	慶應 75p.145
1934	昭和9	秋	船越師範，大塚師範，第一高等学校（旧制）空手演武大会に参加（日本医科大学からも参加）	日医 pp.31-57
1934	昭和9	10月	下田武師範代（早稲田）ご急逝	早大 HP， 早大 50pp.125-145
1934	昭和9	10月20日	富名腰義珍，慶應大学体育会空手部 会誌・拳9号に「空手十年の誕辰を祝して」を著す	拳9号 pp.4-8
1934	昭和9	10月31日	中央大学に空手部（富名腰先生が名誉師範，大塚博紀四段が師範）が出来，慶應に巻き藁を買いに来る	慶應 75p.146
1934	昭和9	11月1日	日本医科大学空手研究会師範・下田武の死去に伴い富名腰義珍が，その後任者として大塚博紀を推薦する	農大 p.207-237
1934	昭和9	11月23日	日本医科大学空手部3周年記念空手演武大会開催，富名腰義珍挨拶，下田武師範追悼，他に本部，慶応，早稲田，商大，拓大，一高，中大，松坂屋が参加，大塚博紀師範も参加	日医 p.22， 日医 pp.31-57
1934	昭和9	11月27日	慶應義塾部員，義豪先生の話聞く（下田先生が亡くなられて各校が義豪先生をねらっている）	慶應 75p.146
1935	昭和10		船越先生主宰の「大日本空手道研究会」を「大日本空手道松濤會」に改称	松濤 60pp.139-147
1935	昭和10		船越義豪，師範代（早稲田）就任	早大 HP， 早大 50pp.125-145
1935	昭和10		「唐手」の文字を改めて，初めて「空手」の名称を使い『空手道教範』を出版する	長嶺 pp.109-120
1935	昭和10		船越義珍・大塚博紀，日本医科大学空手部新入部員歓迎会に参加	日医 pp.31-57
1935	昭和10	5月	大日本武徳会，唐手術初の教士称号を授与（宮城長順）	本カラ pp.201-207
1935	昭和10	5月	大日本武徳会に（松濤館）流儀の制定型を申告	創世 pp.12-32
1935	昭和10	5月5日	東京農業大学空手同好会発足（大塚博紀・川上大三郎）	農大 pp.207-237
1935	昭和10	5月9日	富名腰義珍宅に慶應，早稲田，一高，拓大，商大，中大，日本医大の七校が揃い，連盟問題と本部設立問題を討議	慶應 75p.148
1935	昭和10	5月10日	大日本武徳会が初めて空手術の教士号・錬士号審査を実施し，宮城長順（剛柔流），小西康裕（神道自然流）に対して「教士号」を授与する（錬士号の合格者なし）	農大 pp.207-237
1935	昭和10	5月16日	富名腰義珍宅にて連盟問題話し合われる，時期尚早の結論	慶應 75pp.148-149
1935	昭和10	5月17日	明治大学空手研究会発足	農大 pp.207-237
1935	昭和10	5月20日	國學院大学空手研究会発足（大塚博紀・川上大三郎）	農大 pp.207-237

1935	昭和10	5月25日	船越義珍「空手道教範」を出版	教範：奥付
1935	昭和10	6月9日	中央大学空手倶楽部発足(富名腰義珍, 大塚博紀, 宮地要二郎)	農大 pp.207-237
1935	昭和10	6月19日	日本歯科医科専門学校空手倶楽部発足(大塚博紀・清水清)	農大 pp.207-237
1935	昭和10	6月26日	船越・大塚両師範の審査により日本医科大学空手部昇段進級試験が行われる。大塚師範模範演武を示す。摩文仁賢和師範, 平信賢師範, 仲宗根源和師範も参観。終了後、摩文仁賢和演武を示す	日医 pp.31-57
1935	昭和10	7月	日本医科大学空手部夏合宿(伊豆大島)に大塚師範来島	日医 pp.31-57
1935	昭和10	7月21日	早稲田大学空手部遠征旅行に出発, 船越義豪先生以下, 早稲田大学空手部員12名, 名古屋鶴舞公園公会堂, 神戸武徳殿, 八幡製鉄所武徳殿, 若松中学校, 若松市朝日座と廻った	江上 pp.177-182
1935	昭和10	9月10日	立教大学空手研究会発足(大塚博紀・平川午郎)	農大 pp.207-237
1935	昭和10	9月10日	東京農業大学空手同好会, 空手研究会に改称	農大 pp.207-237
1935	昭和10	10月	下田武師範三十三歳で急逝	嗚呼 pp.25-29
1935	昭和10	10月	早大空手道部船越義豪師範引率, 名古屋, 九州演武行	嗚呼 pp.25-29
1935	昭和10	10月	富山講習会, 戸山小学校演武会	嗚呼 pp.25-29
1935	昭和10	10月13日	松濤會発足	船越 70pp.34-41
1935	昭和10	10月21日	立命館大学空手研究会発足(山口剛玄)	農大 pp.207-237
1935	昭和10	10月21日	東京農業大学空手研究会発会式	農大 pp.207-237
1935	昭和10	11月24日	日本医科大学第4回空手部演武大会, 富名腰師範, 大塚師範出席, 他に日歯, 農大, 中大, 一高, 商大, 松坂屋, 拓大, 早稲田, 慶応の各大学が参加	日医 p.29, 日医 pp.31-57
1935	昭和10	12月	立命館大学唐手拳法部創設	歴年 p.43
1935	昭和10	12月	立命館大学と交換, 宮城長順師範, 与儀実栄氏	嗚呼 pp.25-29
1935	昭和10	12月	「空手道教範」出版	嗚呼 pp.25-29
1935	昭和10	12月21日	富名腰師範宅にて, 早稲田, 拓殖, 商大, 日医, 一高, 中央, 松坂屋, 慶応の列席の下, 義豪氏より大塚博紀氏破門の件が話された	慶應 75pp.150-151
1936	昭和11		富名腰義珍, 許田重発, 「沖縄県人事録」	歴年 p.43
1936	昭和11		「大日本空手道研究会」は「大日本空手道松濤會」と改称	松濤 HP
1936	昭和11		稲垣五兵衛, 錬士号授与	鴻志 HP
1936	昭和11		船越義珍, 船越義豪, 早稲田大学空手部納会に参加	早大 50p.19
1936	昭和11	1月	富名腰義珍, 早稲田寒稽古(第一高等学院)に参加	廣西・写真, 早大 50p.19
1936	昭和11	1月12日	富名腰義珍宅に各校が集まり, 富名腰先生を師範とする学校及びそれに準ずるものを含む大日本学生空手道聯盟を作ることに決定する	慶應 75p.152
1936	昭和11	2月	法政大学空手道部発足, 入江教授, 佐竹理事, 杉元, 杉尾, 佐藤	嗚呼 pp.25-29
1936	昭和11	3月5日	富名腰義珍の真砂町道場に「松濤館道場建設委員会」発足	農大 pp.207-237
1936	昭和11		船越門下の道場幹部らによって道場建設委員会が組織(門人が増えるにつれ, 中山博道師範の道場の空き時間では, 稽古の時間のやりくりが難しくなったため)	長嶺 pp.109-120

1936	昭和11		江上茂（松濤館2代目館長）・広西元信（松濤会理事長），早稲田卒業	早大HP， 早大50pp.125-145
1936	昭和11	春	松濤館道場・建設（豊島区雑司ヶ谷）	早大HP， 早大50pp.125-145
1936	昭和11	5月3日	船越義珍先生，陸軍戸山学校で演武	船越70pp.34-41
1936	昭和11	5月4日	東京工業大学空手研究会発足（大塚博紀・川上大三郎）	農大pp.207-237
1936	昭和11	5月5日	宮城長順（剛柔流），「沖繩空手振興協会」を設立する	農大pp.207-237
1936	昭和11	5月6日	商工空手部演部会（慶應義塾）	慶應75p.306
1936	昭和11	6月	富名腰義珍，戸山学校演武会	嗚呼pp.25-29
1936	昭和11	6月3日	陸軍戸山学校演武会（慶應義塾参加）	慶應75p.306
1936	昭和11	7月	義豪師範，早大空手道部北陸演武	嗚呼pp.25-29
1936	昭和11	9月10日	日本大学医学部空手研究会発足（大塚博紀・川上大三郎）	農大pp.207-237
1936	昭和11	9月20日	東京帝国大学空手研究会，3代目師範に大塚博紀を迎える	農大pp.207-237
1936	昭和11	秋	陸軍戸山学校の要請により再度演武会	松濤60pp.139-147
1936	昭和11		「空手座談会」（主催：琉球新報）昭和会館で開催	沖縄HP
1936	昭和11	10月25日	「空手座談会」（主催：琉球新報）昭和会館で開催，沖縄における空手の発展と，「唐手」から「空手」への名称変更について唐手関係者，県教育行政担当者，報道関係が参加（「拳道学」に議事録が収録）	拳道学pp.269-276， 空手史pp.112-115
1936	昭和11	11月	富名腰義珍，早稲田大学卒業生送別会に参加	空手道pp.126-139
1936	昭和11	11月1日	慶應義塾，船越義豪先生を招き稽古を始める（その後，週に1回程度）・義豪先生の稽古の仕方が義珍先生と余りに違うため慶應では義豪先生を招くまでになんか議論を交わしている（早稲田・拓殖に義豪先生崇拜あり）	慶應75pp.31-33
1936	昭和11		日本学生空手道連盟発会式（青山会館）	早大HP
1936	昭和11	11月7日	大日本学生空手道連盟発会式	慶應75p.306
1936	昭和11	11月7日	大日本学生空手道連盟発会式（渋谷青山公会堂，慶應，一高，商大，拓大，早稲田，法政が参加），富名腰義豪師範が組手型之解説を行う	拓殖pp.1-13
1936	昭和11	11月7日	大日本学生空手道連盟発会式，記念演武会（慶應，一高，拓大，商大，早大，法政）	嗚呼pp.25-29
1936	昭和11	11月8日	船越・広西師範（早稲田）審査の下，日本医科大学空手部昇段・進級試験が行われる。終了後，広西師範の指導と模範演武あり	日医pp.31-57
1936	昭和11	12月25日	沖縄県空手道振興会発足（会長・県知事，副会長連隊区司令官・学務部長，那覇市長）	空話pp.34-37
1936	昭和11		唐手道基本型制定（喜屋武朝徳（きやんちょうとく），屋部憲通，花城長茂，宮城長順，城間真繁，真栄城朝亮（まえしろちょうりょう），知花朝信（ちばなちょうしん），仲宗根源和（なかそねげんわ）	本カラp.232
1937	昭和12		船越義珍，早稲田大学空手部卒業生送別会に参加	早大50p.21
1937	昭和12		宮城長順，小西康裕，唐手術教士号授与	鴻志HP
1937	昭和12		宮城長順，大日本武徳会より空手術教士号授与	歴年p.44
1937	昭和12	3月28日	沖縄県空手道振興会指導部，空手道基本型十二段を正式に制定	大観pp.299-414
1937	昭和12	4月25日	京都帝国大学空手研究会発足（大塚博紀・上野実朗）	農大pp.207-237

1937	昭和12	5月16日	日本医科大学予科新入部員歓迎会(新宿明治製菓)に船越師範・稲永師範参加	日医 pp.31-57
1937	昭和12	7月	義豪師範, 拓大朝鮮遠征	嗚呼 pp.25-29
1937	昭和12	年末	日本医科大学空手部送別会に船越師範・稲永師範参加	日医 pp.31-57
1938	昭和13		江上茂(松濤館2代目館長), 松濤館段級審査委員となる	江上: 著者紹介
1938	昭和13	2月25日	大日本空手振武会発足(師範: 大塚博紀, 幹事長江里口栄一)	農大 pp.207-237
1938	昭和13	3月10日	東京府豊島区雑司ヶ谷町に富名腰義珍の主催する「松濤館道場」完成	農大 pp.207-237
1938	昭和13	5月	大塚博紀, 大日本武徳会より練士の称号を授与される	和道 HP
1938	昭和13		大塚博紀空手術練士号授与	鴻志 HP, 農大 pp.207-237
1938	昭和13	5月5日	船越義珍, 「空手道大観」(仲宗根源和編)に「空手道二十ヶ条と其の解説」を著す	大観: 奥付
1938	昭和13	6月1日	厚生省主催空手紹介演武会(慶應義塾参加)	慶應 75p.306
1938	昭和13	6月	富名腰義珍, 厚生省主催演武会, 於国民体育館, 各官庁体育指導者講習会	嗚呼 pp.25-29
1938	昭和13	6月	松濤會, 厚生省主催演武大会(神田一ツ橋国民体育館)に参加し, 演武, 船越先生による主旨の解説	船越 70pp.34-41, 松濤 60pp.139-147
1938	昭和13	6月24日	保険局演武会(慶應義塾参加)	慶應 75p.306
1938	昭和13	8月	厚生省主催夏季体育講習会(6日間)	嗚呼 pp.25-29, 松濤 60pp.139-147
1938	昭和13	8月23日	目白・雑司ヶ谷松濤館建設開始	船越 70pp.34-41
1938	昭和13	9月10日	帝国大学空手連盟発足	近空 pp.353-363, 農大 pp.207-237
1938	昭和13		陸軍士官学校予科演武会(慶應義塾参加)	慶應 75pp.34-35
1938	昭和13	10月	慶応大学空手部, 日比谷演武会	嗚呼 pp.25-29
1938	昭和13	10月	船越義珍先生, 三百名の門弟を率いて明治神宮体育大会に参加	嗚呼 pp.25-29
1938	昭和13	10月	簡易保険局の演武大会に参加	船越 70pp.34-41
1938	昭和13	11月3日	全日本体操祭, 体操実演会に参加(慶應義塾)	慶應 75p.306
1938	昭和13	11月	明治神宮体育大会に出場, 松濤會門下生四百名出場し, 神宮外苑競技場において, 船越義珍先生の号令で団体演武を行う, この時秩父宮殿下の台覧を賜う	船越 70pp.34-41
1938	昭和13	11月6日	国民体育大会に出場(慶應義塾)	慶應 75p.306
1938	昭和13	11月	陸軍士官学校演武会	嗚呼 pp.25-29, 松濤 60pp.139-147
1939	昭和14		富名腰義珍, 大日本武徳会より空手術・練士号を授与される	和道 HP
1939	昭和14		大塚博紀, 和道流を創始する	FGT p.162
1939	昭和14		船越義豪先生, 中央大学空手に師範として迎えられる	松濤 60pp.151-161
1939	昭和14		東京豊島区雑司が谷に「松濤館道場」を開く	長嶺 pp.109-120
1939	昭和14	1月29日	豊島区雑司ヶ谷六の八一五に松濤館創設, 大日本空手道松濤館発足(東京朝日新聞朝刊昭和14年1月24日の掲示板より)	船越 70pp.34-41, 松濤 60pp.139-147
1939	昭和14	1月29日	豊島区雑司が谷に「松濤館道場」創建, 大極初段・二段・三段, 組手型の「天之型」, 棍の型「松風」を創案発表した	松濤 HP

1939	昭和14	1月29日	松濤館道場落成式，漢那内務次官，南郷次郎講道館長ら出席	嗚呼 pp.25-29
1939	昭和14		東京豊島区雑司が谷に『松濤館道場』を開く	和道 HP
1939	昭和14		松濤館道場・建設（豊島区雑司ヶ谷）	本カラ pp.187-192
1939	昭和14		富名腰門下，江上茂（早稲田），陸軍兵務局管下の陸軍中野学校教官として，空手の実技指導にあたる（～昭和18年10月31日）	廣西 pp.36-43
1939	昭和14	2月1日-4日	船越義珍先生，厚生省主催の空手道講習会（国民体育館）で助手数名とともに指導する（東京朝日新聞朝刊昭和14年1月24日の揭示板より）	松濤 60pp.139-147
1939	昭和14	2月2日	厚生省主催，空手道講習会（国民体育館）に船越義珍先生他参加	船越 70pp.34-41
1939	昭和14	2月	船越義珍，慶應義塾空手部卒業生送別会に参加	慶應 75：写真集
1939	昭和14	春	船越義珍，拓大学生等と共に京都武徳殿武徳祭に参加，翌日立命館大学空手部と交換稽古	拓殖 pp.17-18
1939	昭和14	5月5日	大日本武徳会主催武道大会に船越義珍先生，養豪先生等が出演	船越 70pp.34-41， 松濤 60pp.139-147
1939	昭和14	5月5日	関東学生空手道連盟（東京帝国大学，中央大学，東京農業大学，立教大学，明治大学，慈恵医科大学，日本医科歯科専門学校，日本医科大学，横浜専門学校）が結成される	農大 pp.207-237
1939	昭和14	5月5日	関東学生空手道連盟（東京大学・中央大学・東京農業大学・立教大学・明治大学・慈恵医科大学，日本歯科医学専門学校，東京工業大学，日本大学医学部，横浜専門学校などが参加）	歴年 p.44，東大 60p.200
1939	昭和14	5月7日	大日本武徳会の空手術教士・錬士号授与者，上島三之助（教士・空真流），摩文仁賢和（錬士・糸東流），富名腰義珍（錬士・松濤館流），清水敏之（錬士・四心多久間流），江藤武彦，野沢一也，袖山豊作，櫛橋政次（錬士・自然流），新里仁安（錬士・剛柔流）	農大 pp.207-237
1939	昭和14		上島三之助教士号授与，摩文仁賢和，船越義珍，野沢一世，袖山豊作，船越義豪，櫛橋正次，清水敏之，江藤武彦，新里仁文，錬士号授与	鴻志 HP
1939	昭和14	5月17日	明治大学記念館・関東学生空手道連盟演武会開催	農大 pp.207-237
1939	昭和14	9月20日	海軍経理学校演武会（慶應義塾参加）	慶應 75p.306
1940	昭和15	2月	船越義珍，慶應義塾空手部卒業生送別会に参加	慶應 75：写真集
1940	昭和15	2月頃	中央大学空手会（師範：大塚博紀）解散	飛龍 pp.79-80
1940	昭和15	3月末	中央大学空手道会として発会	飛龍 pp.362-380
1940	昭和15		中央大学，船越義豪先生を師範に迎える	船越 70pp.34-41
1940	昭和15		松濤館流演武会（京都・武徳殿）・船越師範引率のもと松濤館流各大学が参加	早大 HP， 早大 50pp.125-145
1940	昭和15	5月6日	富名腰義珍，京都武徳殿にて空手の団体演武	創世 pp.12-32
1940	昭和15	5月4-6日	旧大日本武徳会主催の紀元二千六百年奉祝・第四十四会武徳祭（京都市岡崎町西天王町・武徳殿）出演に際し各流派，流派名を決定する。恐らく前年の秋ぐらいいまでは固まっていたと考えられる	近空 pp.227-236
1940	昭和15	5月5-6日	紀元2600年記念・第44回武徳祭が京都武徳殿において開催，初めて空手各流派が出演して団体演武を行う	農大 pp.207-237
1940	昭和15		武徳殿での演武に対し，船越義珍に錬士，船越義珍を斡旋した功績で摩文仁賢和に対し教士が授与された。これに対し，門下の江上茂憤慨，廣西元信も審査にあたった柔道側に対して抗議，こうした出来事が，新大日本武徳会（東条武徳会）に加盟しない原因となって行く	松濤 60pp.3-23

1940	昭和15	5月8日	大日本武徳会が「錬士号」の授与者を発表、上野実朗（和道流）、木原秀二郎（和道流）、金城兼盛（きんじょうけんせい）（剛柔流）、比嘉世幸（ひがせこう）（剛柔流）、山口実美（剛柔流）、長嶺将真（松林流）、瓦葺隆輔（自然流）	農大pp.207-237
1940	昭和15		瓦葺隆輔、長嶺将真、金城兼盛、比嘉世幸、山口剛玄、錬士号授与	鴻志HP
1940	昭和15	8月	拓大沖繩遠征	嗚呼pp.25-29
1940	昭和15	11月17日	第三回学演連武会	嗚呼pp.25-29
1940	昭和15	12月2日	船越義珍、松濤の号で日本医科大学学友会会報に「心身鍛練は空手道より」を著す	日医pp.31-57
1941	昭和16		崎浜盛次郎、糸数義男、錬士号授与	鴻志HP
1941	昭和16		沖縄県指定の空手専門委員会（長嶺将真、宮城長順、神谷仁清（かみやじんせい）、新里仁安（しんざとじんあん）、宮里浩司、徳田安文、金城兼正、喜屋武真栄（きやんしんえい）などで構成）が「普及形」完成	慶応HP、歴年p.45
1941	昭和16		船越義珍、慶應大学春合宿に参加	慶應75：写真集
1941	昭和16	5月	明治大学空手部公認記念全日本空手道演武大会（明治大学記念館）、参加流派は松濤館流、剛柔流、糸東流、神道自然流、和道流、参加校は東京帝国大学、慶應義塾大学、早稲田大学、立教大学、拓殖大学、東京農業大学、法政大学、慈恵会医科大学、日本歯科大学、立命館大学、同志社大学、関西学院大学、関西大学、日本歯科専門学校、明治大学の15校	駿空pp.62-63, p.176
1941	昭和16		明治大学空手部の創立何周年かの記念演武会において、空手道の発展の為、現在ばらばらの各流派の統一をはかり流派の違いはそのままにしても互いの交流を深め段位等もバランスのとれたものにするため、何らかの統一した機関を設ける趣旨の意見がまとまり、慶應がその世話役となる。富名腰師範は双手を挙げて賛成され、京都の摩文仁先生、沖縄の宮城・花城先生をはじめ各先生の賛同をえたが、日本が戦争に突入したために、この大事業は消滅した	慶應75pp.37-40
1941	昭和16	9月19日	明治大学記念講堂で空手の演武会が開かれる（摩文仁賢和、小西康裕、大塚博紀、木原秀二郎）	農大pp.207-237
1941	昭和16	9月20日	大日本空手道天の形 発刊	天の形：奥付
1941	昭和16		船越義珍、大日本空手道「天の形」・刊	近空pp.261-270、歴年p.45
1941	昭和16	9月	「増補空手道教範」が出版され付録に、船越先生創案の「天之型」組手型が発表され、大極初段-三段、棍の型「松風」が創案される	松濤60pp.139-147
1941	昭和16	9月20日	松濤會増補版「空手道教範」（船越義珍先生著）廣文堂より出版付録に大極の型を発表	飛龍pp.362-380、松濤60pp.151-161
1941	昭和16		棍の型「松風」完成	飛龍pp.362-380
1941	昭和16	10月	富名腰義珍、早稲田大学卒業繰り上げ送別会に参加	廣西・写真、早大50pp.22-23
1941	昭和16	12月8日	太平洋戦争開戦	慶応HP、歴年p.45
1941	昭和16	末	船越義珍、沖繩へ帰郷（～昭和17年1月はじめ）、20年振り、最後の帰郷	がじゅ3 pp.2-5、松濤60pp.33-36
1942	昭和17	3月20日	新大日本武徳会（別称・東条武徳会）結成	近空pp.271-281
1942	昭和17	3月21日	全国の武道団体を再統合し、大日本武徳会を結成（通称・東条武徳会）	農大pp.207-237

1942	昭和17	3月末	これまでの称号授与者は、教士(小西康裕, 宮城長順, 上島三之助), 練士(清水敏之, 摩文仁賢和, 柏谷真洋, 大塚博紀, 江藤武彦, 富名腰義珍, 新里仁安, 野沢一也, 袖山豊作, 下田武, 橋橋政次, 山本縫乃助, 稲垣虎吉, 三浦一夫, 並木光太郎, 上野実朗, 木原秀二郎, 富名腰義豪, 金城兼盛, 瓦葺隆輔, 長嶺将真, 比嘉世幸, 山口実美), 範士なし。	近空 pp.271-281
1942	昭和17	4月1日	松濤會, 大日本武徳会に参加せず	船越70pp.34-41
1942	昭和17	5月	昭和医専, 慶大, 拓大, 早大等各大学で空手が正課体育となる	嗚呼 pp.25-29
1942	昭和17	6月	船越義豪先生, 廣西元信, 奥山忠男両氏を指揮して陸軍戸山学校の幹部に空手道の実技指導	船越70pp.34-41, 廣西 pp.36-43
1942	昭和17	9月	船越義珍, 慶應義塾卒業生送別記念に参加	慶應75:写真集
1942	昭和17	9月	船越義珍, 早稲田大学空手部送別会に参加	早稲田50p.24
1942	昭和17	10月1日	大日本武徳会(東条武徳会)が, 大塚博紀, 河野稔, 泉川寛喜らに達士号(旧教士号)を授与する	農大 pp.207-237
1943	昭和18	3月	厚生省から「戦時学徒体育要綱」が発令され「空手は柔道と合わせて行うことを得る」という条項が掲載される	松濤60pp.139-147
1943	昭和18		船越義珍, 武徳祭に参加し審査員を務める(昭和15年を受けて, 摩文仁賢和が同席しないことを条件に出す, 但し非公式に会見する)	松濤60pp.3-23
1943	昭和18	6月13日	関東学生空手道連盟が解散する	農大 pp.207-237
1943	昭和18	6月	「学徒動員令」が発令され, 大学生は軍隊に入隊, 次第に松濤館も入門者が少なくなる	松濤60pp.139-147
1943	昭和18	8月	船越義珍, 早稲田大学夏合宿(成増)に参加	早稲田50p.25
1943	昭和18	8月	船越義珍, 早稲田大学空手部送別会(大隈会館)に参加	早稲田50p.25
1943	昭和18	9月	船越義珍, 慶應義塾卒業生送別記念に参加	慶應75:写真集
1943	昭和18	12月	船越義珍『空手道入門』発刊	HKM
1943	昭和18		船越義珍『空手入門』発刊	大観 pp.1-11
1943	昭和18	12月15日	船越義珍『空手入門』(国防武道協会)発刊	歴年 p.45, 入門:奥付
1943	昭和18	終わり頃	船越義豪, 肺壞疽にかかり, 寝たきりとなる	松濤60pp.3-23
1944	昭和19		船越義珍, 大塚博紀達士号授与, 坂上隆祥, 辻川禎親, 練士号授与	鴻志HP.
1944	昭和19		松濤館の練習者の主力は中学生(旧制)になる	松濤60pp.139-147
1944	昭和19		船越義珍先生一時九州に疎開	船越70pp.34-41
1944	昭和19	7月	本部朝基, 逝去(74歳)	歴年 p.45
1945	昭和20	3月9日	大空襲により松濤館焼失	近空 pp.127-137, 農大 pp.207-237
1945	昭和20	4月	東京空襲により松濤館焼失	早大HP, 早大50pp.125-145
1945	昭和20	4月25日	米空軍による東京大空襲により, 松濤館焼失, 以後近くの川村学園の講堂にて稽古する(終戦後10月15日, 復員軍人の仮宿舎となったため, 練習を中止する)	松濤60pp.139-147
1945	昭和20	4月29日	松濤館が東京大空襲により, 焼失	松濤HP, 飛龍 pp.362-380, 創世 pp.12-32
1945	昭和20	6月23日	沖縄戦終結	慶應HP, 歴年 p.45
1945	昭和20	8月15日	太平洋戦争終結	慶應HP, 歴年 p.46

1945	昭和20	8月15日	終戦	早大HP, 早大50pp.125-145
1945	昭和20	11月6日	文部省次官通達により、学校武道が全面的に禁止される	農大 pp.207-237, 創世 pp.12-32
1945	昭和20	11月23日	船越義豪師範代ご逝去	早大HP, 早大50pp.125-145
1945	昭和20	11月24日	富名腰義豪氏死去	慶應 75p.201
1945	昭和20	11月24日	富名腰義豪氏死去(享年39歳)	飛龍 pp.362-380
1945	昭和20	11月24日	船越義豪先生ご逝去	船越 70pp.34-41
1945	昭和20	12月9日	富名腰義豪氏葬儀(護国寺)	慶應 75p.201
1946	昭和21		大浜、広西、GHQ・文部省と交渉し空手は禁止を免れる	鴻志HP
1946	昭和21	3月	中央大学空手部学内で活動再開、地の利がよいので各大学の代表幹部により合同稽古が行われる	松濤 60pp.139-147
1946	昭和21	4月1日	早稲田大学空手部が稽古再開	農大 pp.207-237
1946	昭和21	4月12日	明治大学空手部が稽古再開	農大 pp.207-237
1946	昭和21	5月1日	拓殖大学空手部が稽古再開	農大 pp.207-237
1946	昭和21	11月30日	大日本武徳会が正式に解散する	創世 pp.12-32
1946	昭和21	11月31日	大日本武徳会が正式に解散する	農大 pp.207-237
1947	昭和22	5月5日	東京大学空手部が稽古再開記念演武会を開催	農大 pp.207-237
1947	昭和22	7月	日本空手協会設立、船越義珍が最高師範に就任する	慶応HP, 歴年 p.47
1947	昭和22	9月	船越義珍、疎開先の大分から帰京	創世 pp.12-32
1947	昭和22	9月	船越義珍先生帰京	船越 70pp.34-41
1947	昭和22	11月19日	同志社大学空手部上京、交換稽古(中大)	飛龍 pp.362-380
1947	昭和22	11月	船越義珍先生帰京歓迎演武会(慶應、早稲田、中央、専修、法政、紅陵、日大、明治が参加・早稲田において)	慶應 75p.307
1947	昭和22	11月	富名腰義珍帰京歓迎記念演武会(熊本の疎開地より帰京、早稲田大学道場、和道流、糸東流、剛柔流、松濤館流の各校が参加(全日本学生空手道連盟結成の契機))	農大 pp.207-237
1947	昭和22	11月20日	船越義珍先生、上京祝賀演武会(慶應、早稲田、中大、専修、法政、紅陵、日大、明治、同志社、大阪専門が参加、早稲田大学において)	飛龍 pp.362-380
1948	昭和23頃		遠山寛賢(昭和四年上阪)と富名腰義珍の沖縄唐手術宗家争い	空手道 pp.26-33
1948	昭和23		船越義珍、中山正敏、小幡功、摩文仁賢和、坂上隆祥会見	空手道:写真
1948	昭和23	5月	日本空手協会結成	協会HP
1948	昭和23	6月	六大学連盟発会式・演武会(京橋公会堂)に慶應、早稲田、専修、中央、法政、紅陵が参加	慶應 75p.307
1948	昭和23	9月	合同演武会(千葉県公会堂)に慶應と中央が参加	慶應 75p.308
1948	昭和23	9月25日	学生空手演武会(千葉県教育会館)、参加校は慶應、早稲田、中央、専修、拓殖(中大空手部主催)	飛龍 pp.362-380
1948	昭和23	11月20日	日本学生空手連盟発会式ならびに第1回演武会(京橋公会堂)	飛龍 pp.362-380
1948	昭和23	11月23日	日本空手協会発会式(早稲田大学道場)	農大 pp.207-237
1949	昭和24		講道館にて各大学OBが米空軍体育指導員に空手指導を行う(~昭和28)	早大HP

1949	昭和24	1月	船越義珍，早稲田大学寒稽古に参加	早大50pp.31
1949	昭和24		船越義珍を主席師範とする日本空手協会発足	本カラ pp.187-192
1949	昭和24	5月	日本空手協会結成記念演武会（読売ホール）	慶應75p.308
1949	昭和24	5月27日	日本空手協会初の演武会（東京読売ホール）	農大 pp.207-237
1949	昭和24		日本空手協会設立，最高技術顧問船越義珍先生	船越70pp.34-41
1949	昭和24	5月27日	船越義珍師範，門下生合同の演武会を行う（読売ホール）	飛龍 pp.362-380
1949	昭和24	9月10日	和道流が「全日本空手連盟」を結成（大塚博紀・江里口栄一）	農大 pp.207-237
1950	昭和25	6月16日	船越義珍先生，中央大学空手部創部10周年演武大会に参加	松濤60pp.151-161
1950	昭和25	10月	松濤館六大学京都遠征・法大，中大，専大，拓大，慶大の36名が同志社と立命館大の剛柔流と対戦	早大HP， 早大50pp.125-145
1950	昭和25	10月7日	全日本学生空手道連盟結成準備委員会が発足（紅陵大学）	農大 pp.207-237
1950	昭和25		全国学生空手道連盟発会式・演武会（明治大学講堂）	慶應75p.308
1950	昭和25	10月13日	学校武道の禁止措置解除	創世 pp.12-32
1950	昭和25	12月8日	全日本学生空手道連盟が結成（明治大学記念講堂にて合同演武会開催）	農大 pp.207-237
1950	昭和25	12月8日	全日本学生空手道連盟発足	近空 pp.353-363
1951	昭和26	7月	船越義珍『空手入門』（天池書房）発刊	歴年 p.47
1951	昭和26	11月	船越義珍，慶應義塾秋季大会に参加	慶應75p.308 および写真集
1951	昭和26	12月	船越義珍，早稲田大学空手部創立20周年記念演武会に参加	早大50p.32
1951	昭和26	12月16日	早大空手部創立20周年記念演武会（船越師範参加）	早大HP， 早大50pp.125-145
1952	昭和27		中央大学道場において，午後6時頃から松濤館系の大学（中央大学，早稲田大学，慶応大学，拓殖大学，専修大学）による，戦中からの技術のプランクを埋めるための研究会が開かれていた（～昭和28年）	日医 pp.73-84
1952	昭和27	9月	船越義珍，鎌倉鶴ヶ岡八幡宮奉納演武に参加（慶應義塾）	慶應75p.308
1952	昭和27	11月15日	全日本学生空手道連盟合同演武会開催（明治大学記念講堂）	農大 pp.207-237
1952	昭和27	11月19日	慶應と早稲田の間で初の試合形式の交歓稽古が行われる（早大・大島勲の提案）	慶應75pp.43-47
1952	昭和27	12月	船越義珍，早稲田大学納会に参加	早大50p.33
1952	昭和27	12月	合同稽古（拓殖大学）に慶應，早稲田，中央，法政，明治，日大，東大，立命館，拓殖が参加	慶應75p.308
1953	昭和28	6月3日	米国航空本部の招聘を受けて渡米する「日本武術親米使節団」（小谷澄之団長・6月10日出発）社行演武会開催（神田共立講堂）	農大 pp.207-237
1953	昭和28	6月	船越師範渡来30周年記念演武会（神田共立講堂）	慶應75p.308
1953	昭和28	6月3日	船越義珍先生，上京30周年記念大演武会（共立講堂）	飛龍 pp.362-380
1953	昭和28		大島勲（アメリカ松濤館館長），早稲田卒業	早大HP， 早大50pp.125-145
1953	昭和28	10月8日	宮城長順，逝去（68歳）	歴年 p.48
1953	昭和28	11月18日	全日本学生空手道連盟合同演武会（早稲田大学・大隈講堂）	農大 pp.207-237

1954	昭和29		早大・日本空手協会を脱会	早大HP, 早大50pp.125-145
1954	昭和29	6月	船越義珍、慶應義塾唐手部創立30周年春季大会に参加	慶應75:写真集
1954	昭和29	6月頃	日本空手協会に属している大学の対抗試合が拓大道場で行われた。この時初めて道場に白線の枠を作り、主審、副審をおき、試合時間を三分間とし、「一本」「有効」「判定」を作り、現代の試合形式が試みられた	日医 pp.73-84
1954	昭和29	7月	日本総合武道大会（新設の京都体育館、船越師範参加）	早大HP, 早大50pp.125-145
1954	昭和29	7月3日	日本総合武道大会開催（東京体育館）	農大 pp.207-237
1954	昭和29	7月3日	日本総合武道大会に船越義珍先生他、出場する（東京体育館）	船越70pp.34-41, 松濤60pp.151-161
1954	昭和29	11月21日	学連演武会（大阪中之島公会堂）	慶應75p.309
1954	昭和29	11月21日	全日本学生空手道連盟合同演武会（大阪中之島公会堂）	農大 pp.207-p.237
1955	昭和30		琉球古武道保存振興会設立（会長：平信賢）	沖縄HP、歴年 p.49
1955	昭和30	9月30日	広西元信『目で見える空手道入門』発刊	HKM
1955	昭和30	10月10日	廣西元信『目で見える空手道入門』西澤弘文堂発刊	飛龍 pp.362-380
1956	昭和31	1月	全日本空手道連盟演武会（明治大学講堂）	慶應75p.309
1956	昭和31	1月22日	全日本学生空手道連盟合同演武会（明治大学記念講堂）	農大 pp.207-237
1956	昭和31	5月	合同演武会（日本大学講堂）に慶應、早稲田、日大が参加	慶應75p.309
1956	昭和31	5月	沖縄空手道連盟結成（初代会長・知花朝信）	沖縄HP、歴年 p.49
1956	昭和31	5月	月刊空手道に横間真謹「唐手回想」を著す	歴年 p.49
1956	昭和31	5月20日	全日本学生空手道連盟が試合制度確立のため、「審判研究会」「ルール研究会」を発足させる（東京大学・明治大学・慶應義塾大学・拓殖大学・法政大学・日本大学などが参加）	農大 pp.207-237
1956	昭和31	7月27日	船越義珍先生日本空手協会最高技術顧問を退任	船越70pp.34-41
1956	昭和31	10月11日	船越義珍先生著「空手道一路」発刊（サンケイ出版）	船越70pp.34-41
1956	昭和31		船越義珍「空手道一路」発刊（産業経済新聞社）	HKM、歴年 p.49
1957	昭和32	4月26日	船越義珍師範ご逝去（享年88歳）	早大HP, 早大50pp.125-145
1957	昭和32	4月26日	船越義珍死去（享年88歳）	慶応HP
1957	昭和32	5月10日	雑司ヶ谷斎場において松濤会葬（葬儀委員長大浜信泉早稲田大学体育局長・空手部部長）	廣西 pp.36-43
1957	昭和32	5月11日	船越義珍師範告別式（雑司ヶ谷崇祖堂）	飛龍 pp.362-380
1957	昭和32	5月11日	船越義珍師範告別式（雑司ヶ谷崇祖堂）、早稲田・中央・専修・学習院大他が参列、慶応・拓殖・法政などの日本空手協会加盟団体は葬儀をボイコットする	松濤60pp.139-147
1957	昭和32	5月12日	明治大学空手部創立記念演武会に参加（中大）	飛龍 pp.362-380
1957	昭和32	6月21日	船越先生追悼演武会（両国国際スタジアム）	慶應75p.309
1957	昭和32	7月	全日本学生空手演武会（大阪府立体育館）	慶應75p.309
1957	昭和32	7月4日	全日本学生空手道連盟合同演武会（大阪府立体育館）	農大 pp.207-237
1957	昭和32	10月20日	日本空手協会第1回選手権大会開催	農大 pp.207-237

1957	昭和32	11月30日	第1回全日本学生空手道選手権大会開催（東京都墨田区両国の国際スタジアム（旧国技館），参加29校，優勝（明治大学）	農大pp.207-237
1957	昭和32	11月30日	全国学生空手道連盟・両国国際スタジアム（旧国技館）にて初の公式試合	近空pp.293-303
1958	昭和33		一橋大学空手道部，日本空手協会に加盟する	一空HP
1958	昭和33	4月	旧来の「大日本空手道松濤會」「大日本空道松濤館」を発展的に解消し，現在の「日本空手道松濤會」が発足	松濤HP
1958	昭和33		日本空手協会が社団法人となる	農大pp.207-237
1958	昭和33	4月10日	日本空手協会・文部省から公益法人として認可	協会HP
1958	昭和33	4月26日	船越義珍著「空手道教範」（日月社）より発刊	飛龍pp.362-380
1961	昭和36	3月	千代田区神保町に松濤館焼失以来の本部事務所を開設	松濤HP
1961	昭和36	6月17日	沖縄古武道協会設立（初代会長・比嘉清徳）	沖縄HP，歴年p.54
1962	昭和37	5月10日	全日本学生空手道連盟改組再編成（早稲田大学総長・大浜信泉会長就任）	農大pp.207-237
1963	昭和38	3月	米軍座間・慰安演武会（座間キャンプ）	慶應75p.311
1964	昭和39	5月1日	全日本空手道連盟結成（早稲田大学総長・大浜信泉会長就任）	農大pp.207-237
1964	昭和39	10月	全日本空手道連盟創立	慶応HP，歴年p.56
1967	昭和42		一橋大学空手道部，日本空手協会を脱退	一空HP
1967	昭和42	6月5日	全日本空手道連盟改組，笹川良一（日本船舶振興会会長）が会長に就任	農大pp.207-237
1968	昭和43		「松濤同門会」を創立	慶応HP
1968	昭和43	12月1日	松濤船越義珍先生記念碑落成（北鎌倉円覚寺）	歴年p.60
1969	昭和44	4月1日	全日本空手道連盟，財団法人の認可を受ける（文部省）	農大pp.207-237
1972	昭和47	5月15日	沖縄返還	歴年p.64
1976	昭和51	1月15日	港区芝浦に「本部道場松濤館」再建，江上茂二代目館長（～1981）	飛龍pp.362-380
1976	昭和51	1月18日	港区芝浦に「本部道場松濤館」再建，江上茂二代目館長（～1981）	松濤HP

※注 年号未記載：当該資料に年号記載のない項目，文脈から判断し，妥当と思われる年代を考慮して一覧に記載した。

記事一覧—参考文献略称一覧

図説	綿谷雪 (1967) 図説・古武道史, 青蛙房
歴年	外間哲弘 (2001) 空手道歴史年表, 沖縄図書センター
格歴	藤原稜三 (1990) 格闘技の歴史, ベースボール・マガジン社
近空	儀間真謹・藤原稜三 (1986) 対談 近代空手道の歴史を語る, ベースボール・マガジン社
長嶺	長嶺将真 (1986) 史実と口伝による沖縄の空手・角力名人伝, 新人物往来社
本カラ	岩井虎伯 (2002) 本部朝基と琉球カラテ, 愛隆堂
入門	船越義珍 (1943) 空手入門, 国防武道協会
FGT	Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy (2004) Funakoshi Gichin Tanpenshu. International Ryukyu Karate Research Society.
教範	船越義珍 (1990) 空手道教範復刻版, カヅサ
唐手	富名腰義珍 (1922 (復刻1994)) 琉球拳法 唐手, 緑林堂書店
嗚呼	高木正朝 (1988) 嗚呼風雷空手道, 牧羊社
拳1号	木暮清雄 (編) (1930) 慶應大学空手部部誌【拳】1号, 慶應義塾空手研究会, 1930.11.27
拳2号	慶應義塾空手研究会 (編) (1931) 慶應大学空手部部誌【拳】2号, 慶應義塾空手研究会, 1931.11.1
拳3号	辻岡秀雄 (編) (1932) 慶應大学空手部部誌【拳】3号, 慶應義塾空手研究会, 1932.2.3
拳4号	辻岡秀雄 (編) (1932) 慶應大学空手部部誌【拳】4号, 慶應義塾空手研究会, 1932.6.12
拳5号	辻岡秀雄 (編) (1932) 慶應大学空手部部誌【拳】5号, 慶應義塾空手研究会, 1932.11.15
拳6号	山本孝信・岩本忠雄 (編) (1933) 慶應大学空手部部誌【拳】6号, 慶應義塾空手研究会, 1933.6.1
拳7号	山本孝信・岩本忠雄 (編) (1933) 慶應大学空手部部誌【拳】7号, 慶應義塾空手研究会, 1933.10.31
拳8号	松本信雄 (編) (1934) 慶應大学空手部部誌【拳】8号, 慶應義塾空手研究会, 1934.6.1
拳9号	松本信雄 (編) (1934) 慶應大学空手部部誌【拳】9号, 慶應義塾空手研究会, 1934.10.20
慶應75	三田空手会 (1999) 慶應義塾体育会空手部75年史, 慶應義塾体育会空手部
拓殖	中島智雄・津山克典・松倉栄重 (1979) 拓殖大学麗澤會空手部五十年史, 拓殖大学麗沢会空手部OB会
早大50	内藤武宣 (編) (1982) 早稲田大学空手部の五十年, 稲門空手会
大観	仲宗根源和 (編) (1938 (復刻1991)) 空手道大観, 緑林堂書店
飛龍	大倉二郎・高橋秀年, 小園雅孝 (編) (1990) 飛龍 中央大学空手部創立五十周年記念号, 中央大学学友会体育連盟空手部
空話	仲宗根源和 (1939 (復刻1997)) 空手の話, 榕樹書林
研究	仲宗根源和 (編) (1934 (復刻2003)) 空手研究, 榕樹書林
江上	江上茂 (1977) 空手道入門, 講談社出版研究所
拳道学	大西栄三 (1985) 拳道学, 光書房
空手史	大西栄三 (1999) 空手史, 龍書房
沖縄	外間哲弘 (1984) 沖縄空手道の歩み, 自費出版
天之形	富名腰義珍 (1941) 大日本空手道天之形, 廣文堂書店
船越70	照井徳行 (編) (1992) 船越義珍先生空手本土普及七十年記念, 日本空手道松濤會

駿空	明治大学体育会空手部 創立50周年記念編纂委員会（1990）駿空五十年 明治大学体育会空手部創立50周年記念，明治大学駿台空手会
廣西	玉井俊三（編）（2002）廣西元信追悼録，日本空手道松濤會
江上	大倉二郎（編）（1981）江上茂追悼録，日本空手道松濤會
日医	日本医科大学空手道部五十年史編纂委員会（1982）日本医科大学空手道部五十年史，日本医科大学空手道部五十年史編纂委員会
農大	東洋農業大農友会空手部五十年史編纂委員会（1985）東京農業大学農友会・空手部五十年史，東京農業大学農友会空手部OB会緑空会事務局
がじゅ3	船越義彰（1994）義珍翁・もうひとつの顔，がじゅまる通信No.3，榕樹社
空手道	創造（1977）空手道 保存版，創造
詩文	植村常次郎（編）（1933）富名腰義珍先生還暦記念詩文集，大日本唐手研究会
創世	『月刊空手道』編集部（編）（2003）空手道創世神話，福昌堂
東大60	東京大学空手部六十年史記念号編纂委員会（編）（1985）東京大学空手部六十年史 拳法会報記念号，東京大学拳法会・東京大学空手部
松濤60	照井徳行（編）（1998）松濤館六十年のあゆみ，日本空手道松濤會

記事一覧—参考文献略称一覧

沖縄HP	沖縄空手道HP http://www.wonder-okinawa.jp/023/index2.html 〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎1-2-2 沖縄県庁
HKM	Hawaii Karate Museum HP http://museum.hikari.us/ Charles C. Goodin, Hawaii Karate Museum, 98-211 P.ali Momu Street #640, Aiea, Hawaii 96701 USA
協会HP	社団法人 日本空手協会HP http://www.jka.or.jp/ 〒112-0004 東京都文京区後楽2-23-15
慶応HP	慶應義塾体育会空手部HP http://www.keiokarate.net/ 〒223-0061 横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学体育会空手部
早大HP	早稲田大学空手部HP http://www.waseda-karatebu.org/ 〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学空手部
一空HP	一橋大学空手道部HP http://www.josuikai.net/circles/sports/karate/htms_j/home_frame.htm 〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学空手道部
松濤HP	日本空手道松濤会HP http://www.shotokai.jp/ 〒130-0024 東京都墨田区菊川2丁目1番7号
和道HP	和道流空手道連盟HP http://www.wado-ryu.jp/wado/wado.htm 〒177-0031 東京都練馬区三原台3-21-3
鴻志HP	日本空手道鴻志会HP http://www2.tokai.or.jp/jkka/ 〒418-0056 静岡県富士宮市西町30-25